

特 61
451

俗 通

黑澤鐵腸著



要

全

第 壹 版

治 明

45. 3. 9

夾 内

玉 社 藏 版





まことの信心は

この本に依りて

起るなるべし



まことの信心は

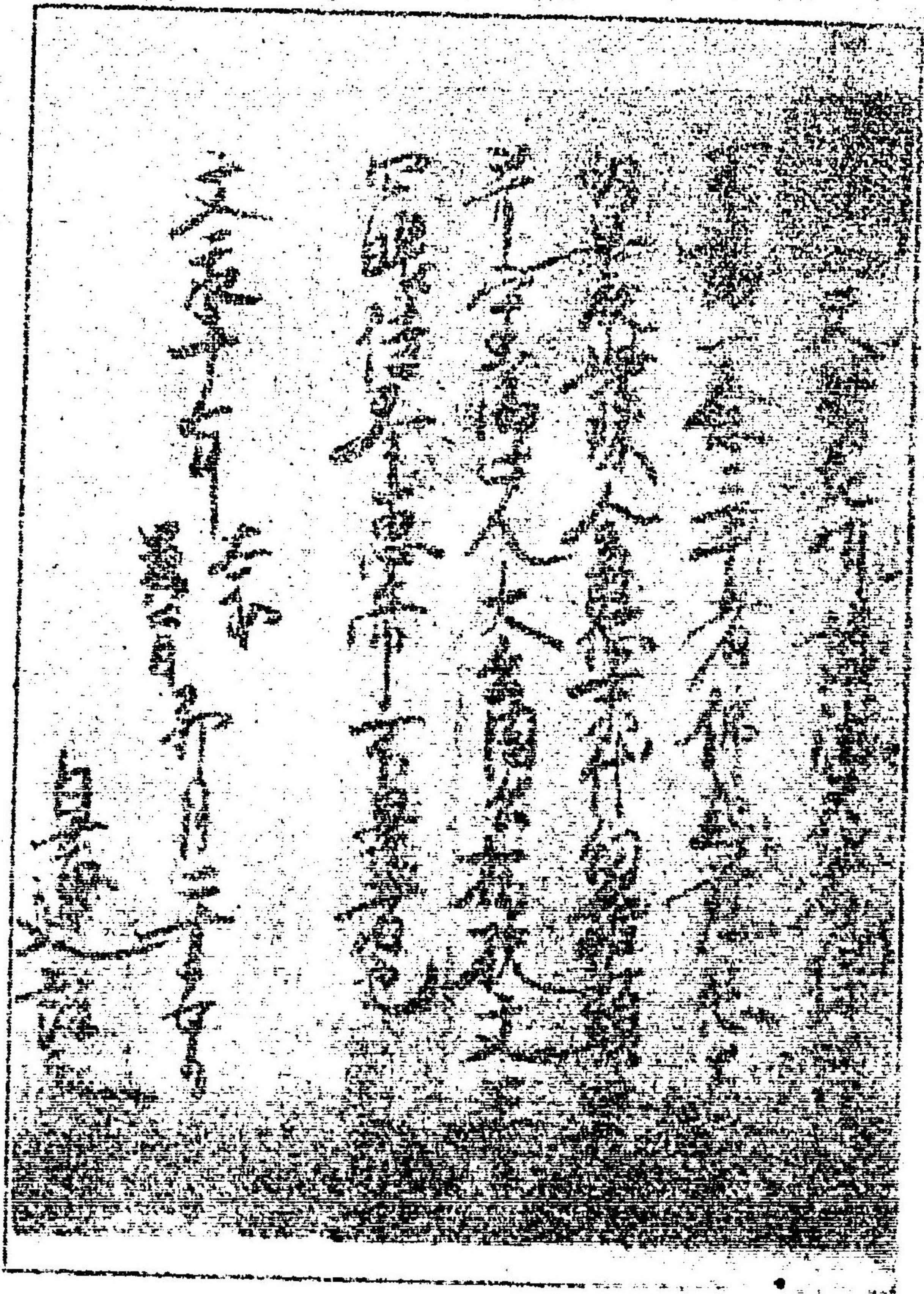
この本に依りて

起るなるべし

佐渡始顯の御本尊

本尊は是れ一宗の生命にして復た信仰の
歸着点なり、散亂せし現下の信仰を統一
して本宗の妙處に達せしむるには此本尊
に如くものなきが故に此處に奉載す

爲先祖代々聖靈菩提 古崎氏寄贈



佐渡始願の御本尊

本尊は是れ一宗の生命にして復た信仰の
歸着点なり、散離せし現下の信仰を統一
して本宗の妙處に達せしむるには此本尊
に如くものなきが故に此處に奉載す

爲先祖代々聖靈菩提 古崎氏寄贈





宗祖の御眞筆

是は觀心本尊抄の末文なり、御文意に依
て特に一宗の精神なりと解するが故に此
處に奉載して讀者の參考に供す

爲釋教圓菩提

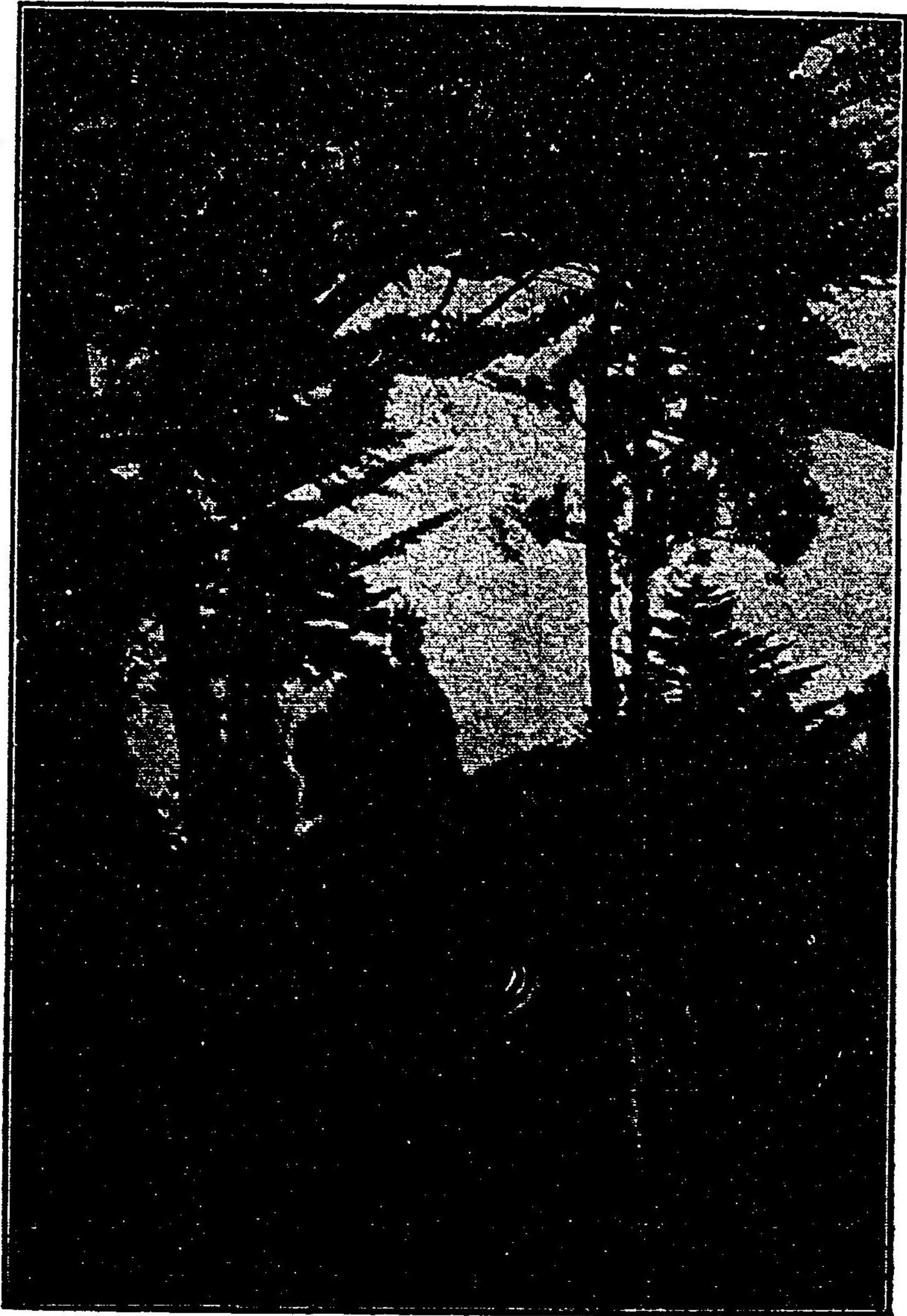
三宅氏寄贈

宗祖の御眞筆

是は觀心本尊抄の末文なり、御文意に依
て特に一宗の精神なりと解するが故に此
處に奉載して讀者の參考に供す

爲釋教圖菩提

三宅氏寄贈



清澄山の絶頂

建長五年四月二十八日、宗祖は此處に停
立して宗建の式を擧させ玉ひたり、今は
本門の題目が現はれたる靈蹟として掲之

爲本行院宗忠日生信士菩提

鈴木田氏寄贈

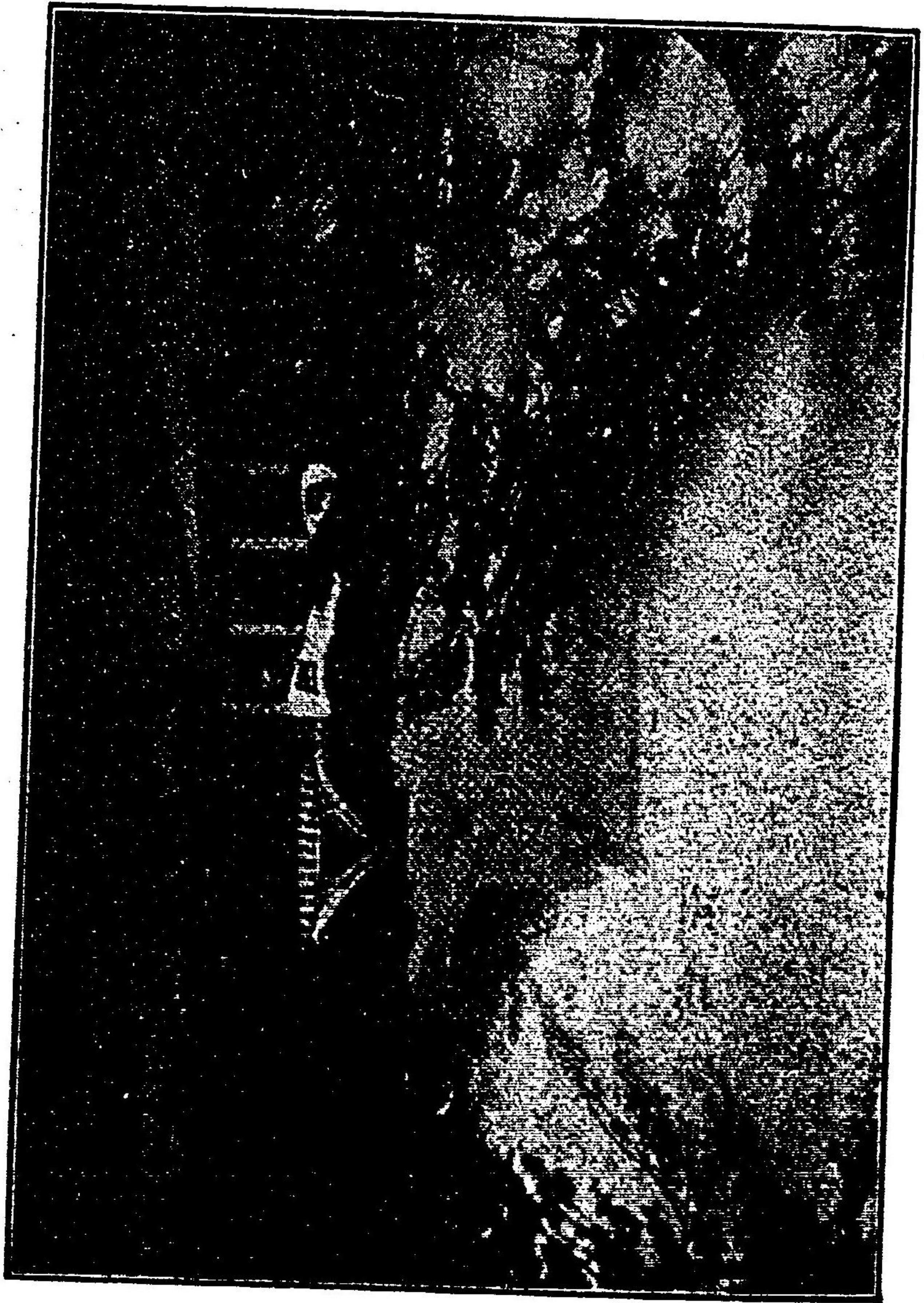


清澄山の経頂

建長五年四月二十八日、宗祖は此處に停
立して宗建の式を奉させ玉ひたり、今は
本門の題目が現はれたる靈蹟として揚之

爲本行院宗忠日住僧土著

鈴木田氏寄贈

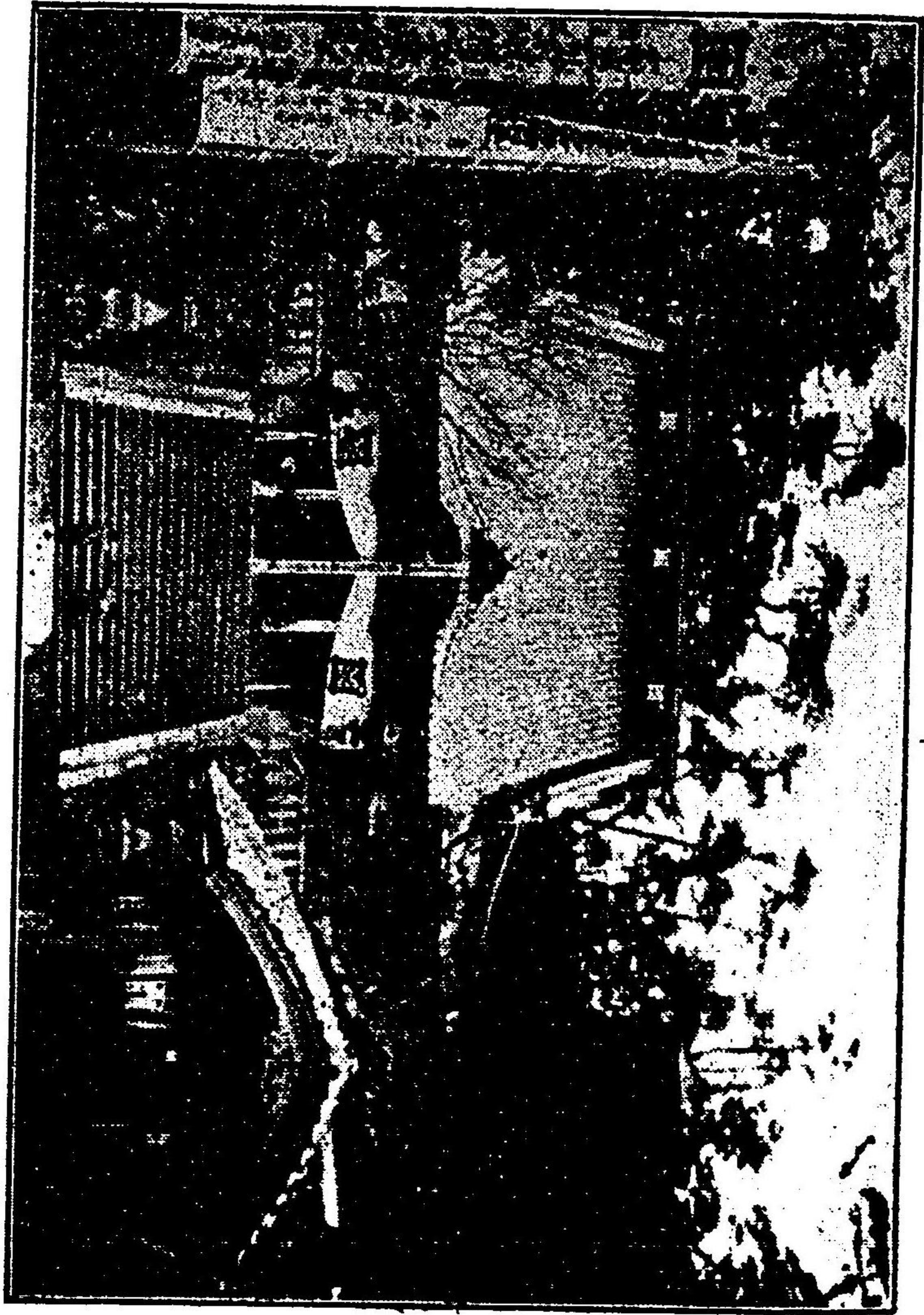




安房國誕生寺

宗祖御誕生の蹟なれば即ち御實家の跡なり、然らば宗祖は此處に於て本門の戒壇を始めさせ玉ひたり、御両親の御授戒が即ち是なり、今は之を因縁として掲載す爲捨權院宗實日喜信士菩提

南氏 寄贈



安房國誕生寺

宗祖御誕生の蹟なれば即ち御實家の跡なり、然らば宗祖は此處に於て本門の戒壇を始めさせ玉ひたり、御両親の御授戒が即ち是なり、今は之を因縁として掲載す

爲拾權院宗實日喜居士菩提

南氏寄贈



相摸國龍口寺

宗祖自ら凡血を清めて本化の後身なりと
自覺し玉ひたる靈蹟が即ち是なり、三大
秘法には因縁なれども、此處に於て大
法の威烈を悟り、二十年の苦心を洗ふて
法義一定の大決心を成させ玉ひたる御蹟
なれば、之を因みとして掲載す

爲先祖代々菩提

某氏寄贈



相模國龍口寺

宗祖自ら凡血を清めて本化の後身なり
自覺し玉ひたる靈蹟が即ち是なり、三大
秘法には因縁なれども、此處に於て大
法の威烈を悟り、二十年の苦心を洗ふて
法義一定の決心を成させ玉ひたる御蹟
なれば、之を因みとして掲載す

爲先祖代々菩提

某氏寄贈

佐渡國妙照寺

文永十年七月八日、宗祖が始めて本門の
本尊を顯はし玉ひたる、佐渡國一の谷の
御靈蹟なり、三大秘法は茲に全く成就す

爲智光院妙幸日達信女菩提

西村氏寄贈

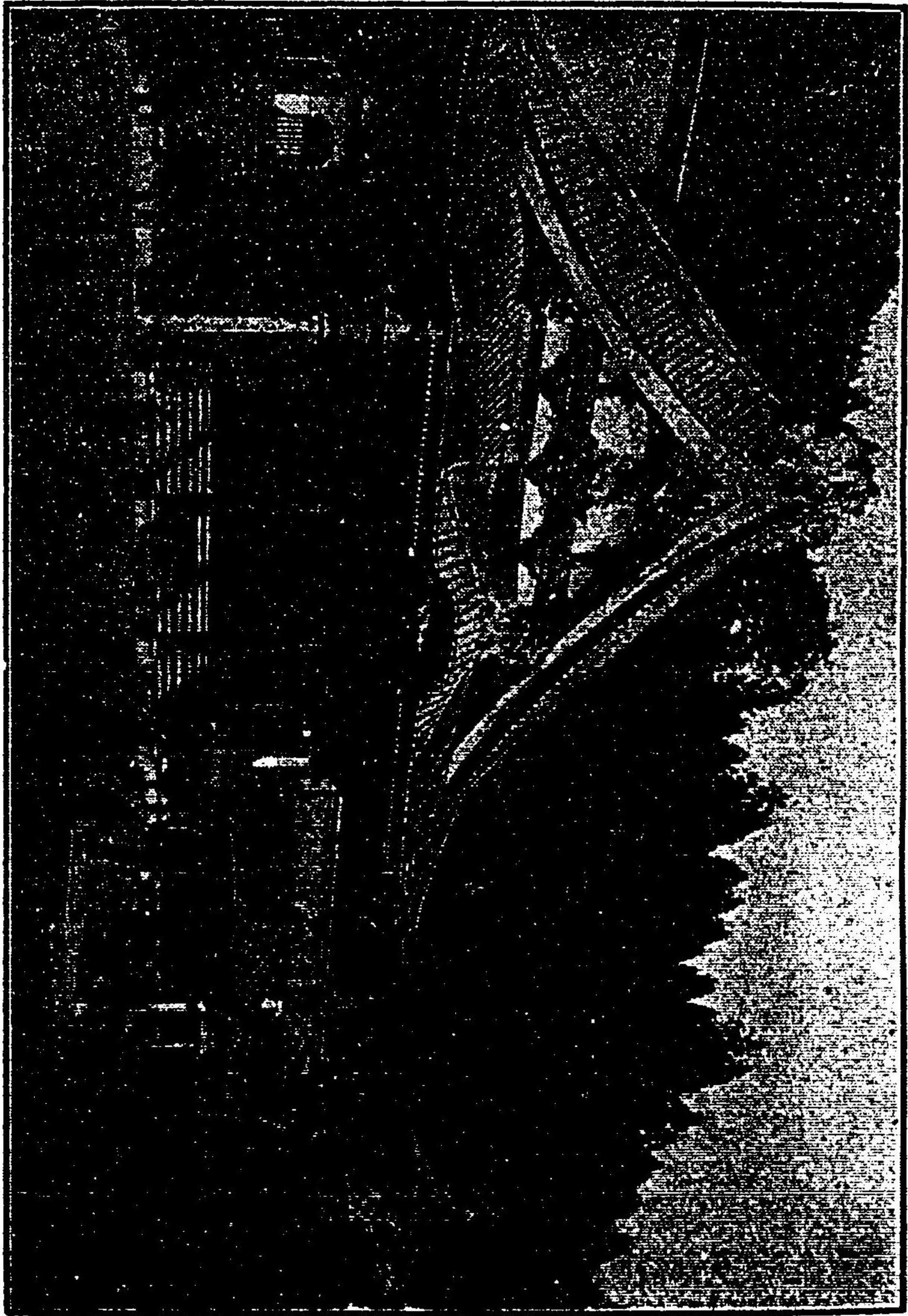


佐渡國妙照寺

文永十年七月八日、宗祖が始めて本門の
本尊を顯はし玉ひたる、佐渡國一の谷の
御靈蹟なり、三大秘法は茲に全く成就す

爲智光院妙幸日達信女菩提

西村氏寄贈



甲斐國身延山

亡き後は墓を身延山に建よ、日蓮が靈は
長へに身延山に止め置くと遺言し玉ひた
る根本靈場が此身延山久遠寺なり

爲髻中院日珠童子菩提

住友氏寄贈

題詞

まことの

日蓮宗は

あの本の中にあり

穢

勝

注 意

今や勸請雜亂の聲が漸く盛んとなり、之を忌む團體が少
さけれども四方に起れり、幸にも悉く法義に熱心の士で
、雷同ながらに信仰は失はず、然れども若し此勸請雜亂
の聲が、世の風潮となりて響くに至らば、或は妄りに是
に代るべき信仰の本據なきを思ひ、遂に信仰を誤つて他
門に入る者を生ぜん、是れ吾人が凡俗の身を顧みず、其
代るべき信仰の本據として本書を著はせし所以なり

通俗 日蓮宗綱要自序

宗祖の在世に曾谷教信なるものあり、
、早く已に妄りに勝劣の異義を唱ひ
て本化の教界を亂さんごせり、然ら
ば若し本宗が、亂れずして佛祖宗祖
の本意を保たば、寧ろ之を不思議と
して迎ふべきか

二
親師の代に京都に於ける像師の蹟は大に亂れ、是が爲に京都の教界に花を失ひしは親師の手控、及び其餘の雜書に依て之を知れり

豊太閤の在世に京都に奥師が在て不受不施の義を唱ひ、大佛開眼の千僧供養に與かるを拒みしは、法義の爲

に寧ろ多とすれども、徳川の初代に池上の樹師が再び之を主張せしは全く何の意たるを知らず、蓋し奥師と樹師と、義は大同小異なれども、其小異が時世の爲に却て大異と成りたればなり

徳川幕府の治政が僧侶に俸録を吻は

してその腰骨を抜きしは、本宗の爲には天文以上の大法亂なり、蓋し法義の亂れ、寧ろ汚れは此時を以て最とすればなり

明治維新の後、世は開けて文化の花は爛蔓たれども、宗門の學者は何れも封建の夢にあこがれ、亂れ寧ろ

汚れたる宗門を其儘に繼承せんこと、蓋し必竟習慣が尙ほ彼れを學者として待つが故なるべし

社會には恐るべき淘汰の爪あり、若し一朝是に彈かれたらんには、佛祖の本懷を祖述し、宗祖の本意を繼承すこと云ふ本宗も、遂にその外に脱出

せずんばあらず、是れ予が凡俗の身を顧みず、本書を著はせし所以なり、大方の兄姉、それ之を以て何ごか思惟す、今や稿を脱せしに就て一言を述べ、之を自序とす

明治四十五年一月、一命を屠蘇して

居士 鐵 腸 識

通俗 日蓮宗綱要

緒言

予は凡俗の身なるが故に、妄りに大法を筆にするは、佛祖宗祖に對して恐れ多しと感じ、從來二十年間、殆んど一日の如く、或は筆に或は口に、單に法義を一定せよと叫びたれども、本宗の學者は悉く啞か聾か、絶て是に答ふる者なし、是に依て今は前後の思慮を失し、以て妄りに筆を執り本書を著はしたり

本書に就ては學者に異義あるべし、所以は曾て之を現大

學長風間隨學師に語りし事あり、又た故大檀林長小林日
董師に語りし事あり、共に義に於ては一言の異義なきが
如くなれども、未だ先哲古賢の末書に之を見ずと云はれ
たればなり

予は先哲古賢の却て學弊に陥り、法華經の所謂須叟聞之
即得究竟の文、及び全隨喜品の五十展轉隨喜功德の文、
藥王品の十喻の文、其他御書にある此經を持つは念佛よ
り尙ほ易いとの文などは更に其意義を味はず、又た宗
教の本意は化他に在り、況んや本宗は末法正意の宗門な
り等の事は夢にだも思はず、徒らに須美の絶頂を究めん

とし、滄海の深底を探らんとするのみなれば、到底宗教
界に實功の擧るべき人とも思はれずとし、以て彼れは學
者として教門の文壇に祠るに止め、直に直授相承とも云
ふべき筆鋒に依て木書を著はしたり

本書を著はすに就ての参考書は、法華經と遺文録とは云
ふに及ばず、其他宗門綱格、本化門下各宗の綱要等なり
、其中小林日董師の本宗綱要が、比較的義の正しいのと
通俗に近いのとの爲に多くは是に依りたり、然れども五
綱三秘の解に至つては時に彼れに反するものあり、讀者
宜しく此意を以て熟讀すべし

次には予は常に清貧を以て榮譽として誇るもの、隨て本書の出版も例に依り書肆に托せんとしたり、然るに社友たる大阪の篤信家三宅芳兵衛氏、資金は自分が供給すれば自から出版し、ゆきを社の藏版として書肆に與ふる利益だけを安値にし、以て購讀者に便せよとの事なりしより、予は此慈言に甘んじ、遂に自ら出版してゆきを社の藏版と爲したり

其次には卷首に掲げし寫真版なり、是れ又た其裏面に記入せし篤信家諸氏の寄贈に成りたり、蓋し是も讀者に安價購求の便を與へんとの篤信の賜なり、故に共に此處に

掲げて其厚意を謝す、南無妙法蓮華經

終りに學者に一言す、公等は性來の俠量なるか、法義に就ては十人十種に説述して而も互に相譲らず、嘆息しながら尙ほ紊れたる法義を糾合しやうとはせず、妄りに後向になつて六百年の前をのみ探り、毫も開けゆく世の將來を思はざる井蛙の見に似たる者なれば、或は本書に就ても時代おくれの議論を爲すなるべし、然れども予は公等が例の御書を以て理窟の龜鑑としたる議論の外は、歡んで之を迎ふる者なり、或は若し之を以て法義の一定に資する材料とするか、全く然らずとするも公等か一定の

法義を設けるかせば、其法義が假令へ本書に反することも予は直に往て公等を讃せん、是れ予は凡俗の身なるを以て飽までも自説を固持せず、公等の法義に前途の光明ありと認めなば、全く之を捨て公等に随ふと云ふ大海の量を示すものなり、請ふ之を了せよ

最後に讀者に一言す、法義は兄弟等が信心の徑路にして復た其歸着点なり、安國論を尊ぶ心には本尊抄は知れまじけれども、本書が全く信心の要津なり矣

明治壬子

一月下院

著者誌之

通俗日蓮宗綱要目錄

筆はしめ……………一頁

第一章 本宗の起源……………十九頁

第二章 本宗の沿革……………二十頁

第三章 本宗の分派……………二十七頁

第四章 本宗の法脈……………三十一頁

第五章 本宗の宗祖……………三十四頁

第六章 本宗の依經……………五十二頁

第七章 本宗の宗名……………六十一頁

第八章 本宗の弘教……………六十二頁

第九章 本宗の行法……………六十八頁

第十章 本宗の利益……………七十一頁

第十一章 本宗の宗致……………七十五頁

第十二章 本宗の證果……………八十四頁

筆 おさめ……………九十三頁

俗通 日蓮宗綱要目錄終

俗通 日蓮宗綱要

居士 鐵 腸 著

筆 は じ め

本宗は天地間の精靈に、妙法蓮華經と名を付て、之を一
 宗の精神としたの嫡々相承の宗門なれば、一閻浮提廣宣
 流布の佛祖の詔勅、一天四海皆歸妙法の宗祖の遺命、之
 を奉載し之を遵守し、以て我が大日本帝國は勿論の事。

東洋の全面より進んで西半球に及ぼし、遂に全世界にまでも其聲を響かしむるは本宗が負ふ所の自然の責任である。左れば本宗は退いては内の勢力を養ひ、進んでは外の發展に努めねばならぬ宗門であります。

然るに現在の本宗では、果して此事が出来ませうか、無謀の人は金さいあれば何でも出来ると思ふて居る様子で、俄かに基金財團を設立して募金に騒いで居ます。吾人は幾ら金があつたとて、宗門の精神は錯亂して居る。學者の脳髓は腐敗して居る。現在の本宗では到底駄目だと思ふて居ます。

先づ宗門の精神が錯亂して居る點から述べよう。本宗は僧俗一般にお題目を唱わさいすれば可いと思ふて居る様子で、試みに尋ねて見れば皆な曰く、本宗の精神はお題目で、之を唱ひさいすれば如意寶珠が手に入ると。此處までは先づ可なりだけれども、所謂如意寶珠とは濡手で泡を掴む事、死んでも壽命が盡きぬ事と解釋して居ます。それだから病氣に罹ればヤレ、稻荷様、相場に手を出せばソレ、妙見様、癩病に罹つた熊本参り、今年は厄年だ、厄除のお祖師様へ参れ、今日は申の日だ、帝釋参り、媽アが産に苦しむ杓子のお祖師様を祈れ、亥の日だ、摩利支天へ

参れ。子の日だ大黒様へ参れ。淋病だ笠森に願をかけ。
梅毒だ慈雲様を祈れ。肩が凝る淨行菩薩を洗る。何の事
だ全く淫祠邪教ではないか。

お題目を唱ひる信心の仕方は全く此通りだ。是が現在の
本宗の信心だとは。實に驚かすには居られませぬ。それ
だから其お題目も。是等迷信の心に満足を買う一種の誦
文として唱ひて居る。こんなお題目が何處にありますか
誰れがこんなお題目を弘めたのか。こんな按配に信心
が墮落して居るから。上行の再誕たる宗祖も厄除。安産
願滿等の肩書がなければ通用せぬではないか。論より

證據だ。同じ宗祖でも特功の肩書がなければ参拜する者
がないではありませんか。

御参考までに。是は實際にあつた一寸との戯れ談でした
。或る所の肩書付の宗祖の安置してある大寺でした。其
縁日に参り合せたのを幸として和尚に戯れました。お祖
師様に肩書を付て祈る様な無禮な事はないと云ふ演説し
やうと思つて参つたのだと。和尚驚いて曰く何うぞ止め
て呉れと。吾人の曰くそんなら肩書なしのお祖師様だけ
の演説しやうかと。和尚の曰く何うぞ頼むと。其和尚は
可なりの學者なるが故に更に戯れて曰く。お祖師様に肩

書を付て祈るのが眞實だらうかと。和尚の曰くそんな筈はないと。吾人の曰く然らば和尚はなせ當山のお祖師様の肩書を除らぬかと。和尚苦笑して曰く寺が立行ぬと。戯れではあつたけれども。寺を維持する爲に宗祖の御威徳を汚す。無禮も是に至つて極まるではないかと。内心には大に憤慨しました。

總てこんな有様です。是でソレ。外に向て努力とか發展とかい出來ませうか。是等の和尚は多少學問があるだけに。自ら非は非と辨識て居ます。然れども多くは賽錢函に迷ふて是が眞實だと思ふて居ます。故に偶々戯れにで

も尋ねて見ますと。お祖師様もお行りなされたと眞面目に答ひます。乃で又た現在の如く甚しくはなかつたが。兎に角にお祖師様も佐渡前には多少お行りなされた。然れども佐渡後に至つて一宗の精神たる法義が極つて後は一切之をお行り遊ばさんだのみか。佐渡前の事は總て方便。法華經の序分たる無量義經の中で。四十餘年未顯眞實と切捨てある爾前經と同じだと思へよと迄に誠めて置せ玉ひたではないかと云へば。佐渡前も佐渡後もあつたものではない。何よりも彼よりも寺が大事だと答ひるのみで。後は平然なものであります。

是が本宗の現在げんざいは宗門しゅうもんの精神せいしんが錯亂さくらんして居ると云ふ點に就ての概要がいがいです。何うでせう宗門しゅうもんの精神せいしんは錯亂さくらんしやうがそんな事は何うでも可い。寺てらさい立派りっぺなればそれで可いと云ふ理窟りくつが何處どこにありますか。

次には學者がくしゃの腦髓のうずいが腐敗ふはいして居る點に就て述ませう。元來らい本宗ほんしゅうは宗門しゅうもんの精神せいしんたる法義ほうぎが紊亂びんらんして居るのと同時に、宗學しゅうがくも亦た學弊がくへいに埋もれて居ます。乃へ學者がくしゃだと云つた所で不規律ふきりつな教育けいようを受けて。不規律ふきりつに讀書たかしょして僅かに學者がくしゃの名を得た丈の學者であるから、學者として征るのは少しく酷こくかも知れぬけれども、兎に角かくに人には學者がくしゃだと稱賛せうさんせられ、已れ自らも學者を以て許して居て。而も現在のげんざい本宗ほんしゅうの亂脈らんみやくを見て平然へいぜんなものだから、乃で腦髓のうずいの腐敗ふはいを以て征るのであります。

試みに學者に就て現在のげんざい本宗ほんしゅうの亂脈らんみやくを語れば、誰れ彼れの別なく皆みなな曰く困つたものだと、公等こうらうなせ起て糾合きうごうせぬかと。彼れ曰く一大偉人だいいじんの出現しゆつげんを待つにあらざれば能はずと。その言は我々の疲腕やせうででは出來ぬ仕事しごとだとの意味なれば。一應いちおうは謙遜けんそんに以て奥床おくゆかしく聞ゆれども、實は是れ懶怠なまけもの者ものの本意ほんねです。何となれば彼等が均しく心こころを揃そろひて。互に我見がけんを捨て公平無私こうへいむしの規矩ききくに則り、議して之を

糾合すれば、決して出来ぬ事はありませぬ。信徒は悉く水の様な心なので、墨を注げば直に黒くなる。朱を流せば忽ちに赤くなるのです。それに彼等は之を爲やうとせぬから、乃で懶怠者だと云ふのです。

尤も現在の我が宗學は學弊に埋もれて居ますから、或る點より云ひますと一寸と手の出し難い所もあります。所謂學弊とは、御書を拜見すれば固にサラリとして何事もよく解ります。然るに是に屬する末書を見ますれば漸く解らなくなります。百年内外に出来たものなどは更に解りませぬ。是は以後の學者が日蓮が法門は淺い様でも實

は深いと仰せられた御語にのみ重きを置いて、何でも其蘊奥を究めたいものだとの心にのみ焦り、漸く六ツケ敷したものです。すると其後より出た學者は更に六ツケ敷し、其次は其次はと何れも其後を逐ふのだから、それで愈々六ツケ敷なつたのです。故に吾人は常に評して笑ひます。本宗の學者は天の高さを究めんとしては須美山の頂きに百尺の竿を立て更に一步を進めんとしたり、地の厚さを究めんとしては滄溟海の底に地獄井戸を鑿て更に其底を探らんとしたりのみして居ると、是が即ち學弊です。是が所謂彼等には一寸と手の出し難い點です。

元來宗教は學問ではありませぬ。學理から出たものに相違はないけれども、宗教と成ては已に行が付て廻るものであるから、何處らかと云は、寧ろ學問を離れたものだと云つて可い位なものです。故に法華經の方便品にも智慧門難解難入とあり、又た御書にも以信得入とか以信代慧とか判してあり、其上に此經難持とか、足の爪先に須彌山を載せて十方の佛土に投打ことは出来ても、此經を經の如く持つ事は出来ないと書てある法華經を、御書には此經を持つのは念佛より尙ほ易いと、幾たびも仰せ遊ばされてあります。其上に尙ほ此經は賢者よりも愚人

男子よりも女人、善人よりも悪人に利益改善あるべしとの御判定もある位なのです。

然るに學者は是等の事には總て無頓着で、妄りに凡識を以て佛智を量る事にのみ汲々とし、徒らに天の高き地の厚きを究めんとして居るのは、要するに腦髓が腐敗して居るからの事なのであります。又た懶怠者の標本であるからの事なのであります。

其外を云は、際限がないから、今は是位にして止め置くが、兎に角に正しい信心の集会所として建て置せ玉ひた本宗も、今では斯の如く夫れ濁つた信心の捨場所となつ

て居ます。其上に斯んな事は卒先して矯正の任に當らねばならぬ學者其ものが、又た腦髓が腐敗して、懶怠者の標本となつて居ます。故に今の所では假令へ金があるにもせよ、外に向て發展を圖るよりも、先づ内を改革し矯正し、以て鞏固に正確に、是が日蓮宗でゐると、世間の學者識者に公言して憚からぬ宗門とするのが肝要です。又た斯くせざれば外に向て發展を圖つたとて、結局は寺の敷が殖ると云ふだけで、伽藍佛教に陥つて了います。何となれば法華經とは只だ口に嘯るのみで、法義として弘むべきものがないから、遂に妙見や稻荷やを持ち出

して、天理教や金光教に均しき迷信を慕ふの結果を見るの外はないが故であります。

其證據には、是に一大事を掲げて知らせやう。宗祖の大慈悲は、本宗の信徒に對して、無量の珍寶を求めやうと云ふ心もないのに、自然に之を授けんとして警句を發して居させ玉ふ事を、即ち臨終の事を習ふて然る後ち他事を學べよとの金口これです。文の上から解釋する時は、先づ死ぬ時の事を稽古して後ち生活の事に移れと云ふが様で、全く轉倒の文句の様に思はれるけれども、實は無常は迅速で、死は何時せまつて來るかも知れぬ。其時

に至つて周障狼狽まわる様では、所詮人世の本能を發揮する事は出来ないから、乃で先づ死ぬ事を習ふて總てに心を打ち付け、本能發揮の上に於ては水火も断じて避けぬと云ふ一大覺悟で行れと云ふのです。何うです是は、妙法蓮華經とは天地間の精靈の名であるから、之を深く信じ、之を心裡に銘刻して居る時は、火も決して焼く事は出来ぬ、水も決して溺はす事は出来ぬ、乃で其活動の効果は、何時の間にもやら無量の珍寶が手に入るのです。無量珍寶不求自得が是なのです。

何うです現在の本宗の信徒に此大覺悟がありますか。是は信徒が悪いのではない、實は教へざるの罪と云ふので、導師たる人が教へないから、乃で信徒に此大覺悟を起すものが無いのです。雷に此大覺悟を起す者が無いと云ふだけなれば未だしもだけれども、アノ回向要文と云つて現在行はれて居るものは彼れは何だ、商賣繁昌家運長久、當病平癒息災延命、罪障消滅哀愍納受、何の事だ、商賣繁昌乃至息災延命、是は祈らずとも平素の至誠の信心の報酬としては常に授けて下さる、又た罪障のある身が眞淨の大法たる妙法蓮華經に遇ひ奉る事が出来るか、更に哀愍納受とは何だ、嘆願か哀訴か、權家權門の信仰

なれば格別だけれども、佛祖の本懐たる本宗の信心には斯んな求哀の意味は更にないぞ。

斯う云つた所で宗門は精神が錯亂して居る、學者は腦髓が腐敗して居る、現在の宗では解りやせまい、乃で書き出す日蓮宗綱要、今の學者等の考ひとは大分異つて居る、其心して讀んで下さい、眞實は一閻浮提廣宣流布、一天四海皆歸妙法に資する日蓮宗綱要です、差當り信徒諸君に眞實の日蓮宗を知らせて上げやうとする日蓮宗綱要です、故らに通俗としたのが即ちそれなのです、左れば是より筆を走らせませう。

第一章 本宗の起原

始めもなく終りもなき妙法蓮華經の神髓に依て建立した宗門なれば、紀元としては素よりあるべき筈がないのです、然れども斯ては宗史を記するに道がなければ、乃で強て名けて五百箇點劫と云へ、又た三千箇點劫と云ふ、蓋し佛祖が天竺に出現し玉はざる其以前の事で、法義に約した紀元なのであります。

それも尙ほ宗門としては史實を失ふの簡ひがあれば、乃で改めて佛祖が天竺の靈山に於て法華經を説き玉ひた時

を以て第一の紀元とします。

次に佛祖は之を以て上行菩薩に附屬し給ひ（法華經神力品）上行菩薩は日蓮と稱し、我が大日本帝國後深草天皇の建長五年四月、我國に於て始めて弘通の端を開かせ玉ひたるを以て、我國に於ける本宗の紀元は此時を以てするのです。但し法華經の弘通は支那に於ては天台大師、日本に於ては傳教大師、共に是より先に弘通があれども、彼れは迹門で總附屬の法華經（法華經屬累品）是は本門で別付屬の法華經（法華經神力品）であるが故に、劫しく法華經とは云ふけれども、判釋に於て天地の相違が

ある所から斯く云ふのです。即ち我國に於る本宗の起源が是れであります。

第二章 本宗の沿革

宗祖の在世には鎌倉を中心として東は兩總に終り、北は北海の孤嶋たる佐渡國に及びたれども、西は僅に豆駿に限りました。然るに滅後六老僧及び其他の碩徳は漸く教域を擴張してそれ以外の國々に教田を開拓せられました。中にも法孫日像は宗祖の遺屬に依て帝都の弘通を爲し幾多の難を排して遂に唱題の聲を天聽に達し奉られました。

た。之を帝都の弘通の始めとします。

是より先き永仁三年正月元日、宗祖の法第六老僧の一人

日持は、其住地たる駿州貞松を發途して道を奥州に取り

北海道へ渡つて遂に滿州に航し、盛んに弘通せられた

事歴もあれども、當時外國の事は判然と知る事が出来ず

殊に現今となつても確かに其事蹟として見るべきもの

がなければ、今は之を以て沿革の中へは加へませぬ。然

れども日像の法弟大覺大僧正が更に山陽道より西海道へ

錫を飛ばし、大に教田を開拓せられたのは現に已に大書

特筆して其巧を賞するものがあります。

是時に當つて本宗は愈々盛を極めたけれども、其中漸く

宗學に弊を生じ、又た漸く法器を失ひたれば、宗門とし

ては未だ衰を告されども、宗學としては次第に不振の傾

向を現はして來ました。時に偶々天臺宗との法論が起り

ました。無論彼れは迹門の昨歴、是れは本門の今歴、諸

經に於て顯然であれば、法論には勝を譲らざりしも、其

勝を譲らざりしが爲に彼は遂に兵を起し火を放ち、以て

帝都に在る我本山を悉く焦土としました。之を天文の法

亂と云つて、我宗爾後の大難であります。

その後文錄慶長の間に於て京都妙覺寺の日奥不受不施の

義を唱ひ、豊太閤の大佛に於ける千僧供養に出席するを拒みしと、寛永年中に武州本門寺の日樹再び之を主張し、徳川家康の怒りに觸れたのとの兩度の災厄は大に宗勢の發展を妨げました。即ち是も天文法亂と共に本宗の大災厄として宗史に大書する所であります。

此時は宗祖の滅後三百年で、宗學も漸く弊の生じた時だから、斯る災厄を招いたものに相違はありませぬ。是に於てか日重日乾日遠等の法器が繼で起り、全國に十數ヶ所の學庠を起し、大に天臺學を興して宗學を資け、傍ら學弊を矯正せしより學風も頓に一變し、大に宗勢の發展

を見るに至りました。

然れども徳川幕府の施政は、一般僧侶に俸録を賜はし、治世の用に充てたが爲に、本宗の僧侶も其渦中へ巻き込れ、一も御上二も御上、御上の言が漸く僧侶の腸に滲染んで、遂に一般に怠風を生じました。是が又た宗學に影況を及ぼして僧侶は本宗あるを忘れ、全く天臺に流れました。此時に當つて日導日輝の學僧出頭し、大に之を嘆いて盛んに宗學を起し、法器の養成に努めました。明治中興の三師と云ふ新居日薩吉川日鑑三村日修は共に日輝の門より出た人であります。

今より四十五年前に世は一變して王政となつた。政府は教部省を置いて一般宗教を監するに至つた所より、本宗も東京に宗教院を設置し、同時に學制も一變して大に宗學を興しました。又明治十八年には宗制寺法を新設して全く獨立の一宗に改めました。

之を本宗の沿革とします。其間幾多の盛衰を経たれども、現在では可なりに盛んな方で、總大五山と三十有餘の本山と、三千六百有餘の平寺院とがあります。尙ほ近來合邦せられた朝鮮にも十數ヶ寺の新寺建立があり、臺灣にも數個の新寺と數個の教會所とがあります。又た飛ん

で布哇にも新寺の建立があれば、既往の三千六百有餘の寺院は、遂に四千を以て數ふるに至るのは、蓋し遠き未來の事ではあるまいと思ひます。

第三章 本宗の分派

本宗には七つの分派があります。曰く興門派（日興を派祖とす）曰く本成寺派（日印を派祖とす）曰く妙滿寺派（日什を派祖とす）曰く八品派（日隆を派祖とす）曰く本隆寺派（日眞を派祖とす）曰く不受不施派（日奥を派祖とす）曰く不受不施講門派（日講を派祖とす）而して

現在各々獨立の一宗たる名稱あれども、今は知り易きを主として、悉く舊名を掲げました。

偕て分派に就ての因由は、御書の中に法華經の判釋が數種に分れて居ます。假令へば本勝迹劣とか、但だ八品に限るとか、或は一品二半とか、壽量の一品とか云ふの類です。而して派祖は悉く一代の學匠であれば我々の分際としては其新意義を窺ひ知る事は出來ねども、要するに學匠と學匠との間に互に斯く見解を異にして分派せしは其研學に就て或は多少議論が衝突して、感情を害した結果が是に至たのではないかと思はれる點もあります。

左れば是は他日に譲る事にしませう。

然れども元を尋ねれば悉く一本の幹より出たのです。左れば強て論じたなれば、なせ正行たる妙法蓮華經に就て論せず、助行たる法華經に就てのみ論せしやとの議論が出ないのでもありません。斯く論ずれば或は法華經より出たる玄題なれば、正助の論よりも前に法華經に就て勝劣を判す。然らば自然に正行たる玄題にも及ぶべしとの議論も起るべければ、兎に角に今は一切是に就ての議論は他日に譲つて了います。

派祖の議論は斯くして筆を擱き、而して之を因みとして

吾人の意見を述べれば、以後三十年若くは五十年、我國の佛教は恐らく念佛宗と題目宗との二宗とならん。現在已に眞言禪寺の宗名はあり、又た念佛に於ては立派は一ならざれども、殆んど悉く彌陀の名を呼んで成佛を期し、追善に供ふれば、他より窺ふ時は全く念佛宗に相違ないと思はれる位であります。左れば將來は必らず彼れは集つて念佛の一宗とならん。此時に至らば我が各派も量を宏にし膽を大にし、以て一宗と成て彼れに當らねば、勢力が微弱で到底佛祖の詔勅、宗祖の遺命を成就する事が出来ないであらうと思ひます。果して然らば今や妄り

に鎖國時代の派祖の議論に抗泥して百年の大計を誤るのではありませぬ。各門派の學僧等、以て之を如何んと爲す。説あらば誘ふ承りませう。幸に一筆の勞を吝むなくんば吾人は大に満足します。

第四章 本宗の法脈

本宗の法脈は二通りに成て居ます。一は外相承で二は内相承であります。

外相承は

本師釋迦牟尼佛 藥王菩薩 (天竺) 天臺大師 (支那)

傳教大師（日本）日蓮聖人（全）であります

内相承は

本師釋迦牟尼佛 上行菩薩（天竺）日蓮聖人（日本）

であります

外相承は法華經屬累品に依るので迹門付屬です。内相承は法華經神力品に依るので本門付屬です。

斯の如く法脈の相承はあれども、實は是は儀式上の相承で、眞實を語らば本宗は無始無終の大法たる妙法蓮華經

に依つて建られた宗門なれば久遠實成の釋迦牟尼佛も、靈山出現の釋迦牟尼佛も、本化上行菩薩も、宗祖日蓮聖

人も、均しく是れ妙法蓮華經の化身にして毫も異つたも

のではないと談ずるのです。語を換たらば、妙法蓮華經と名のある天地間の精靈が、機に依り縁に觸て假りに人

界に御身を現はさせ玉ひたと云ふのです。更に云へ換れば、妙法蓮華經とは天地間の精靈の寶號、天地間の精靈

とは久遠實成の釋迦牟尼佛乃至宗祖日蓮聖人の御事だとなるのであります。

然れども是は觀心の上の所談で、悟りの法門なれば信に入らざれば會得する事は出来ぬ。如何な學者でも凡識たるを免がれねば、已が知分を以ては之を量り知る事は出

言
來ませぬ。乃で先づ記した義式上の内外法脈相承。是に
依て本宗の正しきを知るべしです。

第五章 本宗の宗祖

御名は日蓮。尊稱して末法有縁の大導師とするのです。
幼名は善日磨。姓は藤原。大職冠鎌足公の裔で。御父
は貫名次郎重忠。御母は清原氏。後堀川天皇の貞應元年
二月十六日。大日本東海道安房國長狹郡市川郷小港浦に
誕生す。即ち靈山出現の釋迦牟尼佛入涅槃の後ち二千一
百七十一年に當る年であります。

誕生の時に種々の奇瑞があり。當人また漸く人心づくに
随て出家得度の望みがあります。而して遊戯も自から
常人と異なつて居るから。御両親も心を決して十二歳の
御時に携ひて郷の大山たる清澄寺に登り。住持導善御坊
に事實を語つて徒弟たらしめん事を願はれました。導善
御坊は其相貌を見て大に歡び。是れ我が弟子我が法を弘
むべしと。經の金文を其儘に語つて両親の請を容れ。以
て名を藥王磨と改められました。

是より導善坊に仕事して眞言不思議の窓に向い。専ら密
乘を學んで年を過されました。御年十八歳の時。即ち延

應元年十月八日師の御坊の誘導に隨て薙髮得度を受けり。名を是性房蓮長と改稱せられました。是に於て更に入藏して一切經を通覽せられしに。各宗の宗義に漸く疑團を懷かれました。是よりして普ねく天下を周遊し。各宗の學者に就て其濫奥を叩かんと。師の御坊に請ふて先づ鎌倉に出で。更に叡山に登つて天臺の學に螢雪の勞を積み。次に奈良にゆき法隆寺にゆき四天王寺にゆき。高野山へも登つて弘法大師の跡を尋ね。國學は帝都にて冷泉家に之を習ひ。漢學は大學三郎に佛學と交換的に之を修め。茲に内外の典籍。三國の學問は悉く之を胸に修

めり。歸途伊勢の大廟へ詣で。國家の前途。一身の行末を祈つて歸國せられた。實に御齡三十一歳の御年の初夏でありました。

是より先き叡山に修學せられし時。曾て起りし胸中の疑點は豁然として氷解しました。即ち今は末法の始め。第五の五百歳中である。左れば妙法蓮華經の五字にあらざれば成佛得脱の本懷を達する事は得られぬ。然れども是は釋尊より上行菩薩への所傳なれば。隨て其人にあらざる我は之を我ものとして議論する事は出來ぬ。左れども今や法談を請はる。而して此山は眞言宗なり。若し此

大法を知つて而も眞言を語らば。餘經の一句一偈も交へざれとの法華經の金文に背く。又た思ひ切て法華經を説んかの忽ちにして起り來るべき三類の強敵。我は之を恐れざれども。師の御坊が痛心せさせ玉ふを如何にせん。嗚呼何としたら可からんかと。とつをいつの思案二三日なりしも。一たび出家に身を委しては佛祖と衆生が大事なり。大義は親を滅すとかやと。茲に神心を一決して遂に強請法談を請諾せられました。

其日未明に起き出て人知れず山後の絶頂に登り。旭日が東海の波を色取て天に沖せんとするを待ち。是に向て御聲ほがらかに。南無妙法蓮華經と唱題七遍。是ぞこれ後に知る現在の日蓮宗の宗建の式なりし事を。又た知る三大法の一たる本門の題目なりし事を。

其日の法談に始めて聞く念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊との大判釋の金言。忽ち起り來りし三類の強敵の一たる地頭の東條景信。此言を怒つて御身を一刀兩斷せんと。の暴勢。幸にも師の御坊の制止に依て難は免がれ玉ひしも。是が爲に此山に錫を止むる事あたはず。遂に夜中。人目を避て同寺を退き山を下り玉ひました。途上暗夜に道を探りつつ。私に思し召す様。此經を弘進せ

ば釋尊の現在ですら尙ほ大難が來る。況んや末法の世を
 や。左れば釋尊も迹化の菩薩の請を斥け、特に本化の大
 士たる上行菩薩に付屬せられたり。思ふに是れ難に屈せず
 使命を耻しめざるは本化の大工に如かずとの断定であら
 う。去るにても今は末法の始め第五の五百歳中。なせ上
 行菩薩が出現し玉はぬにや。或は我身は上行菩薩の再誕
 なるか。況滅度後の金言。勸持二十行の未來記。是に堪
 へ忍ぶ事が出来るや否やと。少時し思按に胸を苦しめ玉
 ひしが。稍あつて莞爾と笑み。身は輕し法は重し。死身
 弘法は經の金文。如かず此身を以て法華經に供養せんに

はと。茲に全く一心決定して是より實家に歸り。先づ兩
 親を教化して戒法を授け。次で鎌倉へ出て法幢高く妙法
 蓮華經を掲げられました。

當時天下の災變は全く萬民に寧歳を與へなかつた。是に
 於て立正安國論を著はし。之を前執權北條時頼に呈し。
 天下を諫曉し玉ひました。偶々是が動機となつて居住の
 草庵は焼討せられ。次で伊豆國へ謫流を命せられました。
 居る事三年僅に赦を得て鎌倉へ歸り。後ち故郷に御母
 を訪ねられしに又も小松原に要撃の難に遭ひ。殆んど一
 命も危からんとせしに僅に免れ玉ひました。

斯くても一旦決定し玉ひた一心は毫も弛まない、如之ならず信徒が交々上る折伏廢止の諫めも絶て容れ玉はぬ、蓋し從來の難は人の爲に免がる、事を得た、左れば今後一たび大法の威力にあらざれば助かる事の出来ぬ天下の刑場へ坐して見たいと云ふ、大誓願が内心にあるが爲です、其中に徴候を現はし始めた立正安國論に在る他國浸逼難、蒙古の使者と成て之を知らしめました、是に於て一身の安危を憂ふる念は變じて國家の前途を危ぶむ心となり、愈々折伏の鋒先は鋭くして當り難し、偶々是に就て北條家より喚問を受け玉ひました、勇んで參殿して

對論の後ち、全く諫の容れられざるを豫想して大喝一聲、北條殿は日本國を亡ぼし玉ふかとの極諫に其激怒に觸れ、遂に斷頭場に坐するの刑を招かせ玉ひました、實に是れ文永八年九月十二日、天下三諫の中の第二諫です、龍口に於ける斷頭の刑も法力の加被に依て僅に免かれ玉ひ、是より北海の孤嶋たる佐渡への謫流、深雪の中に飢渴に迫らるゝ等具に辛慘を嘗て漸く一の谷に春を迎ひ玉ひました、此時に當つて私に思し召す様、伊豆の難は船守彌三郎の救護、小松原の難は工藤吉隆の助力、共に是が爲に免がれたれども、龍口は天下の刑場、全く法力の

加被にあらざれば免がるゝ事あたはざるを。不思議に免
がれたのは取も直さず法力の加被。左れば我は上行菩薩
の再誕。我が弘通する法門は上行所傳の大法。今は何を
か疑ふ所はないと。茲に是までに於ける化導の蹟を綜合
して先づ觀心寺本尊抄を著はし。次に十界勸請の大曼荼
羅を圖して信仰の歸着點を確立し。三大秘法を全ふして
一宗の精神を一定し玉ひました。實に文永十年七月八日
の御事で。其大曼荼羅に自ら讚して曰く。佛滅後二千二
百二十餘年の間。一閻浮提内に未だ之れ有ざる大曼荼羅
なり。日蓮始めて之を闡すと。一大壯言であります。

是より先き。佐渡前と佐渡後とを弟子且那に注意して置
かねば。後世必らず法義を亂すべしと豫期し。以て龍の
口以前に於ける日蓮が法義は。總て是れ佛祖の爾前經と
同じく。弘教の方便に之を用へたのである。然らば後來
決して佐渡前に重きを置き。佐渡前を修習するなかれと
三澤抄而して後ち法義の一定であります。
時に立正安國論の豫言たる自界反逆難は北條家の一門中
に内亂が起つて事實となりました。又た他國侵逼難も蒙
古の襲來と成て將に事實の上に見はれんとする前徵が誰
人の目にも映る様になりました。是に於て北條家も大に

悟る所があつて、遂に赦免の状を發しました。是に依て
 又た鎌倉へ歸られしに、北條家は之を聞くと直に參殿を
 促し、會見するに至つて曰く、蒙古の襲來は凡そ何年頃
 なるやと。宗祖の曰く、經文には年月なければ凡そ何年
 頃と明言する事あたはざれども、天の氣色の雷ならざる
 に依て按ずれば、恐らくは今年の中を出でざるべしと。
 北條家の曰く、西門の外に七堂伽藍の愛染堂を建立し、
 衣鉢の料に莊田壹千町を寄附し、聖人を是に住持せしめ
 んとす如何んと。宗祖笑つて曰く、日蓮は此度にて天下
 を諫めし事三たび、而して三たびともに容れられず。然

るに今や此言あり、要するに醫藥を斥けて病氣の回瘥を
 望むに均し、日蓮争でが是に甘んずべしや、先哲も云へ
 り、諫むべきを諫めざるは之を尸位と云ひ、退くべきを
 退かざるは之を懷寵と云ふ。尸位と懷寵とは共に國の賊
 なりと。日蓮之を恐るゝが故に今日より斷然身を山林に
 托すべし云々、袖を拂つて北條家を辭し、草庵に歸つて
 是より身延山に退居せられました。

今年果して蒙古の大軍は襲來しました。始め對嶋を占領
 し次に壹岐を占領し、進んで肥前の西岸を荒して遂に筑
 前の博多へ押寄せました。是に於て國中は震駭し、今上

は岩清水八幡へ幸し身を以て難に代らんと御獄禱一周
 日北條家また使者を身延山に遣つて國禱を托しました
 此時旦那の中の心なきものは國難を顧みずして手柄
 顔に謗法の報なりと吹聴せり是に依て一書を發して曰
 く小蒙古國が大日本國へ襲ひ來る日蓮が弟子旦那の
 中に萬一にも之を謗法の報なりなど公言する者あらば直
 に破門すべし云々(小蒙古國御書)斯て一室に閉ぢ籠つ
 て恐敵退散の祈禱に丹精を抽んでられました
 時は是れ文永十一年十月蒙古の賊軍は筑前の博多に於
 て我が大軍と數日戰鬪せしが勝敗は互にありしも偶々

一夜暴風の起るありて賊船の大半を覆没せり賊兵是に
 驚いて風の風まるのを待ち夜中に殘兵ををさめて悉く
 朝鮮へ航し國へ歸りました
 是より宗祖は一心を國難に托し其再來を未發に防がんと
 身延山の草庵に在て更に國禱に餘念なし其中に歲
 月は經過し草庵は壁おち軒かたむきて全く荒家に均し
 檀頭南部六郎實長富木播摩守胤繼等數々新寺建立
 を勸むれども國難が根底を攘ふ迄はとの言を以て之を
 許し玉はず而して一方には壁は墮て寝ながらに月を
 見るとか經は卷ねども風が壁の穴より吹き込んで自然

に巻て吳るとか。又は四本の柱が頭を投げて猿の遊戯場と成つたとか。泣言に均しき文を草して後世の法義を忘れて伽藍に執着する者を誡め玉ひました。

弘安四年に至つて又も蒙古の大軍は襲來しました。蒙古朝鮮支那三國の兵を合して十萬餘の兵艦九百餘艘にて一氣に我國を屠らんとし。同じく對嶋壹岐の二國を占領して筑前の博多へ襲ひ來りました。我國は兼て期せし事として直に秋田盛宗を軍監と爲し。九州と四國との兵を以て是に當り。數日間同所に於て互に一勝一敗。七月三十日の夜に至つて又も一大暴風が起り。賊船の大半を覆沒せ

り。翌朝に至つて我が兵は是を見て直に賊艦の根據地たる志賀嶋へ進撃し。殘兵三千餘人を捕へて僅に三人を殘し。餘は悉く那珂川で斬りました。

是に宗祖の愁眉は始めて開けました。然るに其翌弘安五年八月微恙に罹られ。他は左までに感せざりしも。自ら再び起つ能はざるを前知し。佛祖が靈山より良に當る跋提河の邊り。純提が家にて涅槃に入らせ給ひた例を逐はんと。身延山を出て武州に往き。多摩川の邊り池上右衛門太夫宗仲が邸に入り。數日間の静養中に帝都の弘通を法孫日像に托し。靈魂は身延山に止めん。墓碑は身

延山のよさんに建立こんりつすべし等の滅後めつごの事ことを悉く儘つして其十月十三日にち、宗仲むねなが邸内ていないに新あらたに建立こんりつせし法華堂ほっけだうに於て、安祥あんせうとして入滅にうめつせらしました。因ちなに其翌々日そのよくくじつたひ茶毘ちあひに付し、御骨みこつを身延山みのよさんに送り、葬儀さうぎを嚴修げんしゆする等御遺言ごごいごんは悉く實行じつぎやうせり。之これを本宗ほんしゆの宗祖しゆその實傳じつでんとします。

第六章 本宗の依經

妙法蓮華經壹部めうほうれんげけふいちぶ（鳩摩羅什譯）無量義經壹部むれうぎけふいちぶ（曇摩伽陀耶舍譯）觀普賢經壹部くわんふげんけふいちぶ（曇摩密多譯）の三部、外ほかに註法華經十卷しゆけうじくわう（宗祖しゆその註ちゆ、舊私集要文）御義口傳二卷ごぎくふでんくわん（宗祖しゆそ

の口授上足日興筆記）日向記（宗社の口授。上足日向筆記）遺文錄三十卷（宗祖の著書及び消息類等一切）を論釋に代用して居ます。

妙法蓮華經は佛祖五十年説教の骨目、一切藏經の神隨です。宗祖が之を撰用せられたのは、法脈の項にもある如く、全く宗祖其人が妙法蓮華經の化身であるが故であります。而して翻へつて佛祖所説の順序を述べますれば、爾前四十二年間の所説は皆な法華經を説かんが爲の方便です。故に之を判して爲實施權と云ひます。蓋し實とは具に眞實と云ふて法華經の事、又た權とは具に假權と云

ふて爾前四十二の年間經説の事、乃ち更に具に法華經を説んが爲に先づ四十二年間方便の權經を施されたと云ふ事であります。

次には開權顯實、是は權經の門を開ひて眞實の法華經を顯はしたと云ふ事であります。

其次には廢權立實、是は已に眞實たる法華經が顯はれて後は、何日までも權經權門に執着せずして、速に之を廢して眞實たる法華經を立て是に歸依する事です。

斯の如く施開廢の三字を以て佛祖五十年の所説を判じ、以て一乘眞實の法華經を立るのを本宗の正依とするので

乃で之を所依の經典と定めたのです。

法華經に亦た本迹の二門があります。二十八品の中で前の十四品は迹門、後の十四品は本門です。本宗は昔迹本の判釋に依て本門を採るけれども、迹門を離れた本門はない。本門を離れた迹門はない。乃で強て判して本勝迹劣とはするけれども、所依の經典としては本迹雙用にします。其譯は一部の判釋に就て、法師寶塔に事おこり、涌出壽量に事とのへ、神力屬累に事おわると云ふ事があつて、本迹全く通じて居るが故です。

無量義經は法華經の開經として之を採用して居ます。

偕さて此この經けうは三さん品ひんより成なて居ゐる。其その義ぎは一いつ法ぽうより無む量りやう法ぽうを
出いし。無む量りやう法ぽうを一いつ法ぽうに收おさむる事ことを明あかしてあるので。法ほ華け
經けう方ぽう便べん品ひんの。唯いう。一いつ乘じやう法ぽう無む二に亦やく無む三さんと云いふ金きん文ぶんを活くわつ用やうす
る義ぎ理りを精せい神しんとして居ゐるが故ゆです。今いま詳くわしく之これを説ごさ
ますれば。一いつ法ぽうとは實じつ相きやうで真しん實じつ法ぽうの事ことです。無む量りやう法ぽうとは
二に法ぽう四し果くわより始はまるのです。又また二に法ぽうとは頓とん漸ぜんの法ぽうで
真しん實じつより漸ぜんく鈍どんになつて來くる事こと。四し果くわとは聲せい聞もん乃ない至し佛ぶつで
各おの々の果くわ報ほうが別べつ々くにある事ことです。恰あたも算さん盤ばんの上うへに百ひやく千せん萬まん
億おくと無む量りやうの數すうを算さん出しゅつするけれども。其その無む量りやうの數すうが又また只ただ
だ一いつに歸きするが如ごとき理りを明あかに説ごたが故ゆに。之これを無む量りやう義ぎ

經けうと名なけ。法ほ華け經けうの開かい經けうとしたのです。

觀くわん普ふ賢けん經けうは法ほ華け經けうの結けつ經けうとして之これを採さい用やうして居ゐます。

偕さて此この經けうは如に來らい滅めつ後ごの衆しゆ生じやうの爲ために普ふ賢けんの觀くわん門もん及び其その六ろく
根こんの業ごう障じやうを懺ぜん悔げする法ぽうを説ごたもので。全まく法ほ華け經けうの觀くわん發はつ
品ひんと相あ表ひやう裏りするを以もつて之これを結けつ經けうとしたのです。

註ちゆ法ほ華け經けうは宗しゆ祖そ自みづから折をりに觸ふれ時ときに依より。經けう論ろん釋しゃく疏しよの中うちで
肝かん要やうな文もんを抜は萃すいして所しよ持ぢの法ほ華け經けうに科くわ經もんを合あせ。註ちゆ記きせ

られたものです。故ゆに以い前ぜんは此この抜は萃すいの文もんのみを編へん纂さんして
之これを私し集じゆ要やう文もんと稱せうし用もちへたものです。今いま是これに就つて云いは
んに。天てん臺だいの判はん釋じやくの中うちに。文もん在ざい爾に前ぜん義ぎ在ざい法ほ華けと云いふ事ことが

あります。所以は肝要な文が四十二年間の諸經の中に在
 ても、其文では獨立して之を要文とする事は出来ぬ。乃
 で法華經の義を以て之を採用して始めて要文の効力が生
 じて來ると云ふ事なのです。例令へば斯うです。阿彌陀
 如來が如何に威張つた事を云つた文があつても、其義が
 法華經になけらねば、其威張は全く空威張だと云ふが如
 き事なのであります。故に宗祖は是に注意して、一切の
 要文を悉く是に集められたのです。

御義口傳は法華經の肝要を觀心の法門に約し、上足弟子
 の爲に宗祖が之を妙法蓮華經の五字に結び付け、證道の

實義を口授し玉ひた筆記なのであります。
 日向記も亦た大同小異で、三年間に是が終りを告げられ
 た筆記なのであります。

遺文録は元は内外御書と云ひました。宗祖の滅後一周忌
 までに集まりし宗祖の親跡は之を録内として上足六老僧
 が編輯して是に證印せられてあります。是か四十卷一百
 四十餘篇です。又た其後に至つて集まつたものを編輯し
 て録外とします。是が二十五卷二百五十餘篇です。而し
 て録内には守護國家論、選時抄、開目抄、報恩抄等の大
 篇なものが多いが爲に、篇數としては少なけれども、紙

數多きが爲に隨て斯く卷數が多いのです。是に反して録外には大部なものがない爲に、篇數が多いのにも拘はらず、卷數としては少ないのであります。

今より四十年ほど前に小川泰堂と云ふ人がありました。此人が内外御書の編纂の不完全なのを嘆き、多年の苦心に現在せし宗祖の親跡あるものは悉く是に照合し、年次を逐ふて編纂されました。是が遺文録です。又た近來加藤文雅と云ふ人が二三の青年學者を諸方に使せしめ、自ら監して更に改訂編纂せしものがある。是を御遺文集と云ふ。縮刷の小本です。

第七章 本宗の宗名

妙法蓮華經は本師釋迦牟尼佛が世に出現し玉ひた一大事因縁の經で、一に釋尊出世の本懐と云ふのです。其宗は此經を所依の經典とし、宗祖を妙法蓮華經の化身とするのであります。故に所依の經典に依る時は妙法蓮華經宗と略して法華宗と云ひます。今は此經を弘通せし人に依りて日蓮宗と稱して居ます。

宗祖は自ら法華宗と稱して居させ玉ひました。又た法華宗號の綸旨も現存してあれば、維新以前までは天台法華

宗の名に簡んで専ら日蓮法華宗と稱して居ました。左れば日蓮宗と云ふのは、此日蓮法華宗の略稱として付た名稱なのであります。

第八章 本宗の弘教

是に三軌の攝折、五綱の三つがあります。今ま先づ三軌より述べませう。抑も三軌とは法華經の入如來室、着如來衣、坐如來座と云ふ文に依のです。具に入如來室とは法華經を弘通する者は常に如來の大慈悲心を以て已が心とし、弘教に就ては如何なる場合に依るも決して愛

憎怨嫉の念を起さぬと云ふ事で、又た着如來衣とは弘教に就ての總ての進退動作悉く柔和忍辱を離れずと云ふ事で、又た坐如來座とは内に諸法に渉る一切の智慧を貯ひ、外に諸根に對して隨機演說し、以て諸根に充分の満足を與ふと云ふ事でありませう。

次に攝折とは具に攝受と折伏との二門です。攝受門は俗に來る者は拒まずと云ふが如き意味で、何者たるを擇ばず悉く之を攝じ之を受るのです。近來の流行語に清濁併せ呑むの襟度と云ふ事がありますが、稍々是と類似した文意で、量は大海の如しと云ふ様な事です。併し我は宗

教なるが故に善惡共に之を攝受して悉く醍醐の一味に化せしむるを主とすれば、此點に於ては世間の所謂清濁併せ呑むの意とは多少相違する所があるのでせう。左れども今は用なきが故に之を判別しませぬ。又た折伏門は、末法に入ては妙法蓮華經の外に成佛得脱の道なければ、強て此道に歸依せしめんとする佛祖の大慈大悲を其儘に嚴やかな言動に現はして、將に此道に歸依せんとするを妨げる者、妨げられて此道より遠ざからんとする者を呵責する事、一に妙法蓮華經を弘通する者の大責任なのです。涅槃經に曰く、若し善比丘たりとも破法の者を見

て、擱て呵責し拳處し驅譴せずば是れ我が法中の仇なりと。即ち法華經に背く者を見て知らぬ顔で過さば却て其者が佛祖の怨敵だと云ふ事です。又た法華經は之を信すれば順縁となり、之を謗すれば逆縁となるの二縁があれは、折伏に依て此二縁の中の何れかを結ばせんと云ふ義です。又た弘教の二規矩たる廢立、又は破立の二門にも當れば、場合に依て之を行する是れ弘教者の覺悟であります。要するに攝受は母の慈なるが如く、折伏は父の嚴なるが如し、共に全く佛祖が一切衆生を哀愍し玉ふ大慈大悲の外はないのであります。

次に五綱とは、一に教、二に機、三に時、四に國、五に序であります。而して教は宗を立る所以、機は人を察する所以、時は世に應ずる所以、國は方を定むる所以、序は變に應じ宜に適ふ所以なのです。又た教は宗を立る所以とは、佛祖五十年の教に小大顯密權實の差別あれども、末法に入ては其中の實たる妙法蓮華經の外に成佛得脱の道なければ、是に隨て妙法蓮華經を撰み、以て之を立て宗とした事を云ふのです。又た機は人を察する所以とは、末法の人は解脱の門を閉て佛法を儀式上の振舞に止まるが如く觀じて、毫も其本領を信心する者が無い。乃

で佛勅使は更に世に出で強て妙法蓮華經を弘通して下種結縁せしめ、同時に解脱の門を開いてやる事です。又た時は世に應ずる所以とは、末法の世は總ての白法は隱沒して修法の根底たる戒定慧の三學も絶て世に行はれぬ。乃で一切の行法は悉く之を無視しても、是に代るに信心さへあれば、行法を以て積むべき功德は之を妙法蓮華經の中に含め、其儘に授與する教法を開いてやる事です。又た國は方を定むる所以とは、方角に依て物事は異なり人情も違へば、弘教の方法も是に隨て斟酌せねばならぬ事です。又た序は變に應じ宜に適ふ所以とは、教法流布

の前後を察して全く誤りなからしむる事を云ふのです。例令へば醫師が病患を診するに先づ以て其發病の前後の容體を聞取り、次に檢診して然る後に藥を與ふるが如きものであります。

第九章 本宗の行法

法華經には五種の行法が説てあります。所謂五種の行法とは、一に受持、二に讀、三に誦、四に解説、五に書寫です。又た受持とは、戒法と同時に受た妙法蓮華經を能く持つ事で、讀とは經文を展べて讀經唱題する事、誦とは

は經文をなしに闡誦する事、解説とは其智力に隨て演説説教する事、書寫とは法華經又は立題を筆に任せて紙の上にかき寫す事であります。

元來法華經を信心するには、必ずしも斯の如く五種の行を修せねばならぬのであるけれども、末法に入ての粗悪なる衆生の機根は、斯る難行苦行に近い行法を修する者はない。乃で若し之を悉く修せねば法華經の信心にはならぬと云は、是が爲に遂に衆生は佛縁に遠ざかり、粗悪の性魂を増長するに至れば、之を以て宗祖の大慈大悲は其中の一つ、即ち受持の一行を正意として他を悉く

是に攝して了はせ玉ひました。本宗は受持の一行を以て解脱の正縁とし。又た之を以て妙覺の正位に順すと云ふのが全く此事なのであります。

詳しくは三秘の項に於て述るけれども。今ま略して其一分を語らば、受持は戒法の異名であります。戒法は信力の故に一切の功德の具備した妙法蓮華經を授かる事であり。又た念力の故に此已に授かつた妙法蓮華經を持つ事でもあります。今身より佛身に至るまで。能く持ち奉ると云ふのが即ち是に對する誓言であります。

第十章 本宗の利益

種熟脱の三利益は過去遠々劫より法華經には附て離れぬ大利益であります。種とは具に下種と云ふので種を下す事。熟とは具に成熟と云ふので、其種が萌を生じ果實を熟させる事。脱とは具に解脱と云ふので、已に熟した果實を取入る事です。例令へば春の彼岸過ぎに苗代へ粃を蒔くのが下種で、秋の彼岸過ぎに稻が黄ばんで來たのが熟成で、冬至前後に其稻を刈り取り、米にして藏へ收めるのが脱益なのであります。

今ま法華經に就て之を述べますれば、過去遠々劫に佛祖が法華經を説せ玉ひたのは下種で、その後に至り漸次に是が熟し脱しました。又大通佛の下種はその後に至り、出世番々に是が熟し脱しました。又た釋尊が靈山に於て法華經を説せ玉ひたのは下種で、その後ち正像二千年の間、之が熟し脱しました。其次に末法です。末法に入つては釋尊の御在世の正因は已に脱し儘したので、其始め五百歲中に於てすら已に一切衆生に成佛の正因はないのです。末法の機根は粗惡であると云ふのが是れです。乃で佛祖の大慈大悲は、又も人界に身を現はして法華經を弘通し

○以て成佛の種を下し此衆生に正因を結ばしめ玉ふのです。宗祖の出現が即ち是なのであります。

宗祖の出現は三世諸佛が難行苦行の爲に得られた一切の功德を悉く集めて妙法蓮華經の五字に之を包み、以て之を成佛の正因なき一切衆生に授け玉ふのです。一應は下種だけけれども、再應は粗惡な機根に對して徐ろに修行の功を積んで熟脱の二益を圖れと云つた所で、到底出來ない事と察して、其下種益と同時に成熟の解脱の二益も兼ね授け玉ふのです。煩惱即菩提、生死即涅槃と云ふのが是です。

また煩惱即菩提と云ふに就て、爾前四十二年間の經々では、煩惱を奇麗に取去て其跡へ菩提を注ぎ込めよと云ふのであれども、本門法華經に來つては、煩惱を其儘に菩提に化せしむと云ふのです。又本宗の實義に於ては、妙法蓮華經の五字に包んだ功德の効力は、之を信心すると同時に大活動を爲して、煩惱を其儘に直ちに菩提と化せしめ玉ふと談ずるのです。宗祖が汚泥を嫌はゞ蓮花を取る可からず、伊蘭を憎まば梅檀ある可からずと仰せられてあるのが即ち是です。

要するに本宗の利益は、何日も法華經に付て離れの種熟脱の三益が、宗祖に依て因果同時と成り、信心に依て直ちに授かる妙法蓮華經の五字に包んだ一切の功德、是が又諸天等の加被力と成て現はれ來るので、受持と同時に如意寶珠を我物とするのです。

第十一章 本宗の宗致

宗致とは具に一宗の秘要と云ふ事、近來行はるゝ語に改むれば信心に對する安心です。偕て本宗の安心は三大秘法で、具には三つの大事の秘密の法と云ふのです。宗祖は之を龍樹天親天臺傳教の殘し

玉ひたる大法と仰せられてあります。成ほど法華經海量品の如來秘密神通之力の文を以て直に此三大秘法の出所とし、又た之を以て一切の功德を授かる信心の規矩として弘通せられたのは龍樹天親天臺傳教の弘教の跡には見へませぬ。無論是等の論師人師は其人でなければ、例令へ内心には會得して居ても、外に向て公然と弘通せられないのが、却て其論師人師の人格の高さを證して居るのです。兎に角に是は上行所傳の大法だもの、迹化の菩薩の論する所ではありませぬ。況んやそれ以下の方々をやであります。

次に三大秘法を宗學に依て述べば、本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇の三つであります。然れども今は建立の順序に依て本門の題目、本門の戒壇、本門の本尊の三つとします。所謂建立の順序とは、建長五年四月二十八日、清澄山の絶頂に登つて旭日の海波を破つて東天に昇らんとするを待ち、是に向て唱題せられたのが本門の題目の始まりで、全年五月十五日鎌倉へ出でんとして先づ實家に歸り、諒々と両親を教化して戒法を授け玉ひたのが本門の戒壇の始まりで、文永十年七月八日、佐渡國の一の谷の草庵に於て圖させ玉ひたのが本門の本尊の始ま

りなので、それで斯く云ふのです。

今また此三大秘法に就て一々に解を示さば、本門の題目とは、法華經の表題で妙法蓮華經の五脱を云ふのです。然して此妙法蓮華經の五字は、久遠の大古より法華經には付て離れぬ名目なれば、法華經に昔迹本の三釋があれば各々悉く此名目もある筈です。然れども昔迹にある二名目は只だ名目だけで、他に何等効能がなければ、本門にある名目は、三世十方の諸佛の一切の功德を悉く集めて之を具足せしめたものであるが故に、特に彼れに簡んで本門の二字を冠し、本門の題目と云ふのです。

又た本門の戒壇とは、妙法の大圓戒を授かる場所です。又の名を道場と云ふのです。偕て又た妙法の大圓戒とは、略して之を戒法と云ふ。儀式に於ては淨土宗の五重相傳、禪宗の授戒作法、直言天臺二宗の秘密灌頂と相均しきものなれども、彼れは權經上より出た戒法なれば、只だ儀式だけに止まるもの、是は實經より出た戒法なれば、全く三世に通徹するものとの相違があります。又た本門の本尊とは、十界勸請の大曼荼羅を云ふのです。之を本尊と云ふ所以のものは、本來信心の最大根本尊儀なるが故に、けれども、今は略して單に本尊と云ふのです。或は諸佛

集しゅう。或あるひくは功德集等くつとくしゅうどうの別名べつめいもあつて。一々に述立のべたつれば随分ずいぶん長文談ながぶんだんもあれども。今は必要ひつやうなければ略りやくすとして。偕きて此本尊このほんぞんに本門ほんもんの二字にじを冠かぶせたのは。前まへにも述のべた通り本門ほんもん法華經ほっけけいより出たものであるが故ゆゑです。

以上いじやうの三大秘法さいだいひほうに就つて。或あるひは題目だいまくは口に唱となひ。戒壇かいだんは身みに持たち。本尊ほんぞんは意こころに念ねんず。故ゆゑに身口意しんくういの三行さんぎやうに當あたれりとか。或あるひは戒壇かいだんも本尊ほんぞんも題目だいまくより出たれば。要やうは只ただ題目だいまくの一つひとつにあるとか。或あるひは本尊ほんぞんに就つて人法じんぽうの別べつがあるとか。例れいの學弊がくへいに陥おちつて居る學者がくしゃの中には論ろんずる者ものもあれども。今は信心しんくを根本こんぽんとし。之これを助たすくるに行いを以もつてする宗教しゅうけい

の上うへに於おては更さらに其必要そのひつやうを見みざれば是等こゝろの議論ぎろんは彼かれに讓ゆづつて此處こゝには述のべませぬ。

然しかれども此この三大秘法さいだいひほうは宗致しゅうちの秘極ひきよく。即すなはち本宗ほんしゅうの安心あんしんなれば。更さらに進すすんで其要領そのやうりやうを盡つくしませう。即すなはち順じゆんか逆ぎやくかの縁ねんが熟じゆくして法華經ほっけけいを信心しんくする行者げうじやとなれば。佛ぶつ祖そ宗しゅう祖そは其その信心しんじんを愛あいして其行者そのげうじやを戒壇かいだんに坐ざせしめ。三世諸佛さんぜしよぶつの所有あもゆる功德くつとくを包つんだ妙法蓮華經めうほうれんげけいの五字ごじを其行者そのげうじやに授まうけさせ玉たまふ。所謂いわゆる五字ごじは本門ほんもんの題目だいまくで。授まうけさせ玉たまふ場所は本門ほんもんの戒壇かいだんで。功德くつとくは本門ほんもんの本尊ほんぞんであります。是これと同時に行者げうじやは妙覺めうかくの位くらゐに昇のぼります。語ことばを換かて云いへば

○ 行者は茲に即身成佛したので、身は未だ凡夫たる境界を脱せざれども、位は已に久遠實成の本佛と同じく尊くなりなりました。是に於て諸大菩薩、諸天善神等は晝夜の別なく行者の一身を守護し、續ひて其行動、其家居をも守護せさせ玉ふのです。宗祖の所謂人が貴ければ處も貴いと仰せられたのが是です。左れば是より後の行者は、深く此事を心裡に銘刻して、我は已に即身成佛したもので、何者か我に仇せんや、何者か我が行動を妨げんやとの決意に住し、報恩謝徳の念を盛んにして營業に勉勵し、いすれば可いのです。彼の罪障消滅を祈つたり、商賈繁

昌を念じたり、或は濡手で泡を掴まんとする非望を願つたりなどするのは大なる誤りです。何となれば願はずとも道に叶ひし正當の事なれば諸大菩薩や諸天善神やが久遠本佛の嚴命を遵守し、其盛んなる報恩謝徳の念を辿り、晝と夜との隔なく、又た瞬く間も油断なく、其人其家を嚴重に守護せさせ玉ふが故です。或は誤解して、斯くなれば僧侶の用を失す等と論ずる者もありませう。乃で一言念の爲に、所謂報恩謝徳の念が盛んになれば、己れ自身の供養だけでは不足だと感ずるのは當然の事です。況んや己れ自身は營業の勉勵に些の

餘暇なき身の上なれば、恰も花を購つて佛前に供ふるが如く、僧侶に讀經唱題せしめて是より湧き出る功德を購ひ、之を以て供養にするのです。僧侶の本領は一面は佛祖宗祖の使者である、故に衆生に對しては佛祖宗祖の事を行ひ、又た一面は衆生の代人である、故に佛祖宗祖に對しては衆生の事を行ふ、是れ千古に渝らぬ格言であります。

第十二章 本宗の證果

佛祖の正判たる法華經の金文には背ひても、佛祖の遺言

たる涅槃經の聖訓は破つても、時代おくれの人師や開祖の判釋に重きを置き、以て迷へる衆生の向背を一宗の大事とし、是にのみ戀々汲々する宗門なれば、證果やなどは何うでも可いけれども、苟も佛祖の本懐を其儘に祖述し、或時は佛立宗の名を以て宗教界に臨む本宗に在ては、證果を以て最も重しとするのです。證果とは具に證道結果と云ふ事で、安心に住した後の成行なのです。語を換れば死後の靈魂の打着所の事なのです。偕て安心に住したとは、前章にも明かに述べてある如く、本宗の法義は修行を爲さず功德を積まぬ、末法に於

ける粗惡の機根に佛祖の正縁を結ばしめ、是より起る所の信心に因して三世十方の諸佛が曾て修し得られた大功徳を、悉く妙法蓮華經の五字に包んで之を授けるのである。故に其授かりし者は、之を持つて以後は信心の念を報恩謝徳の心と改め、自ら是を行ひつゝ己が一身一家を擧て其妙法蓮華經の五字に托し、其外に餘念を起さず堅く安心して營業に勉勵するに在のです。而して此義を能く守り、此旨に堅く隨て餘念を起さざるのを安心に住したと云ふのであります。

偕て安心には住して居る。左れば其以後は、是れ證果で

ある。抑も證果は、其元由を盡して云は、凡そ成佛せんとするに就ては、是に相當する修行を爲ねはならぬ。時代に依て修行の方法は異なるけれども、要するに佛道の修行は餘り安樂でもなければ又面白い事でもない。乃で一言に云ふと難行苦行である。然れども末法の衆生には到底も之は出来ぬ。是れ故に其修行の代りに信心する。其信心に對して佛祖は三世十方の諸佛が、自ら修行して成佛し玉ひた難行苦行の功徳を悉く集め、之を末法の衆生の爲に妙法蓮華經の五字に包んで遺し置せ玉ひたのを、宗祖は之を受けて其衆生に授けさせ玉ふのです。

故に證果は無論三世十方の諸佛の通りと見て間違はない
 のです。左れば若し此三世十方の諸佛が、素寒貧の馬鹿
 者であつたなれば、本宗の證果も其通りであるけれども
 智慧の塊りが諸佛の御身、如意法珠が諸佛の御身代な
 れば、隨て此證果を得た者は、時に臨んで智慧は噴水の
 如く涌き出で、徳は電燈の如く輝き、壽命は百年の上に
 延び、家運は千年の後までも昌ひ、寶の山に住宅を構ひ
 て、扇の如く末ほど廣くなつた目出たい家庭を作り、安
 樂に現世を過すのです。

又た死後の打着所とは、無論法華經に至つては娑婆即寂

光であれば、此娑婆世界が即ち寂光の淨土です。法華
 經に衆生の劫つきて大火に焼るゝと見る時も、我が此土
 は安穩にして天人常に充滿す。園林諸の堂閣種々の寶
 を以て莊嚴すとあるのが是です。觀心本尊抄に今ま本地
 の娑婆世界は三災を離れ四劫を出たる常住の淨土なりと
 あるのが是です。故に此娑婆世界を離れて他に十萬億土
 を探すにも及ばぬ。又た靈山が天竺に限つた譯でもあり
 ませぬ。宗祖の曰く、此授職を得るの人は争で現世に妙
 覺を成せざらんや。我等が居住して一乘を修行する處は
 何國なりとも皆な是れ寂光の都なるべし。我等の弟子

檀那だんなは一步いっぽを行なずして天竺てんじくの靈鷲山れいじゆせんを見みり 本有ほんぬの寂光じやくくわう
 へ往復おうふくすと、其中そのうちにある授職じゆしやくは功德くふとくを包つんだ妙法蓮華經めうほうれんげけう
 の五字ごじを授まかる事こと、妙覺めうかくは久遠くわんげん本佛ほんぶつの異名いめう、一乘いちじやうは法華ほふけ
 經けう、本有ほんぬは三世常住さんぜじやうじゆ、寂光じやくくわうは淨土じゆつどの事ことであります。
 然しからば我等われらが死後しごの打着所うちつきどころは、此娑婆世界このしやほせかいを離はなれて外ほかに
 はないのです。三世常住さんぜじやうじゆなれば過去くわこも此娑婆世界このしやほせかい、現在げんざい
 も此娑婆世界このしやほせかい、未來みらいも亦またた此娑婆世界このしやほせかいです。其中そのうちに三惡さんあく
 道どう六道界等りくだうかいとうの別わかれはあれども、法華經ほふけけうの行者げうしやは煩惱ぼんのう即菩提じやくぼだい
 なれば、其三惡道さんあくどうも六道界等りくだうかいとうも、其儘そのまに佛界ぶつがいとし、寂光じやくくわう
 の淨土じゆつどとするのです。左されば生せいも歡よろこぶに足たらず、死しも悲かなし

むに足たらず、只ただ其形骸そのかたちが凡夫ほんぶの眼界げんがいを出入しゆつにうするのみの
 事ことで、根本こんぽんに於おいては些すこしの變動へんどうがあるのではありませぬ。
 宗祖しゆその曰いく、佛已ほとけすでに過去くわこにも滅めつせず未來みらいにも生せいせず、所しよ
 化け以もつて同體どうたいなりと、其中そのうちに所化しよけと云いふのが凡夫衆生ほんぶしゆせいの事こと
 で、又またた法華經ほふけけうの行者げうじやの事ことなのであります。
 其外そのほか法華經ほふけけうに不老不死ふらうふすとあり、御書ごしよに生死せいじ即涅槃じやくねはんとある
 のは皆みなな是これ三世常住さんぜじやうじゆの事ことで、生せいも歡よろこぶに足たらず、死しも
 悲かなむに足たらず、只ただ形體かたちが凡夫ほんぶの眼界げんがいを出入しゆつにうする迄までの事こと
 だと云いふのです。左されば死後しごの打着所うちつきどころも、無論むろん一步いっぽも行な
 ざる靈鷲山れいじゆせんで、少時しほらく形體かたちを此處こゝに休やすませたのみ、其中そのうち

七々日中の若くは三回忌までに又も人界に形體を現はして苦樂の間に出入するのです。

法義の妙は只だ迷と悟とのみ。而して之を信得するを悟りと云ひ。是に疑惑を懐くのを迷と云ふ。迷悟の別は只だ心中に信疑を明かにすると否とです。死後の打着所も之を信得すれば固に明瞭。是に疑惑を懐かば絶て得る所がない。妙覺の佛陀。豈に悟らずして之を得んや。我を離れて別に法界はない。法界を離れて別に我はない。左れば我は法界の主。法界は我物。死後の打着所豈に別に求むるには及ばんやです。

書をさめ

本宗の法義は。云はずとも從淺至深にあれば。其源底を究めんとするには一生を是に委して尙ほ足らぬのであらう。然れどもそれは學者の仕事で。宗教者としては化他を主要とせねばならぬが故に。學問よりも寧ろ行狀の正しきを正意とす。故に今は敢て學說に均泥せず。務めて通俗に資しました。其無作三身とか。一念三千とか。乃至成佛の三義とか云ふ事に筆を假さ。りしも是が爲である。と見て貫はねばなりません。

次に本宗の安心です。章中に已に收められたれば、今更ら重ねて述べる要はなきに似たれども、勿論秘要が中の秘要の大事が中の大事なれば、此處に改めて御書を引用し、以て其説の出所を現はして置ませう。

天晴ぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べき歟。一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此珠を包み、末代幼稚の頸に懸さしめ玉ふ。四大菩薩の此人を守護し玉ふ事。大周公の成王を攝扶し、四酷が慧常に侍扶せんに異ならざるもの也。

是はこれ觀心本尊抄の末文です。故に學者は例の序正流通の文談で、或は是は流通分である。正宗分に文を欠けるものは之を採らぬなど、自分勝手に論ずる者もあらうけれども、吾人は元來御書に對しては序正流通の文談に重きを置かぬ。所以は宗祖の大量なる、之を筆にせさせ玉ふ迄の用意は極めて周到なれども、筆を手にせさせ玉ひて後は、著書も消息も毫も擇ぶなく、殆んど一瀉千里の勢を以て總て完結せさせ玉ひてあります。左れば其御筆の跡に、争でか序正流通などの面倒がありません。殊に此觀心本尊抄の如きは、尙ほ更ら勢が全く獅子奮迅の

概を現はしてあります。卷首の寫眞版を拜せば、實際に是が會得せられます。故に吾人は此末文を、要するにと云ふ意味で、一部の精神を茲に概活し、以て繰返させ玉ひたものだと常に拜察して居ます。故に是に就て更に法義を述べ、以て根據を堅固にして置ませう。

一天晴れ渡る時は滿土に些の暗い所がない。法華經は智慧の源なれば、之を持つ者は業務に於て些の妨げがない然れども、末法の衆生は之を辨ひざるが故に、佛祖は妙法蓮華經の五字に一切の功德を包み（本門の題目）以て之を信心する者の頸に懸て下さる（本門の戒壇）そこで

此功德を詮索して見れば、全く是れ如意寶珠である（本門の本尊）。左れば是にて已に位は妙覺の佛陀だ。故に四大菩薩や諸天善神やは晝夜の別なく其人を守護し、且つ其人を裸育て威光が十方法界に輝く正眞の佛陀にして下さるのです。大公周公の成王を攝扶す云々との御文が全く是なのであります。

更に是に註を加へますれば、成王は周の二代で十四歳の時に皇帝の位に即た人です。然れども年齢が僅に十四歳の獨立して國政を料理する事は出来ませぬ。恰も今ま云ひました位だけの佛陀の様なものです。そこで親の武王

概を現はしてあります。卷首の寫眞版を拜せば、實際に是が會得せられます。故に吾人は此末文を、要するにと云ふ意味で、一部の精神を茲に概活し、以て繰返させ玉ひたものだと常に拜察して居ます。故に是に就て更に法義を述べ、以て根據を堅固にして置ませう。

一天晴れ渡る時は滿土に些の暗い所がない。法華經は智慧の源なれば、之を持つ者は業務に於て些の妨げがない然れども、未法の衆生は之を辨ひざるが故に、佛祖は妙法蓮華經の五字に一切の功德を包み（本門の題目）以て之を信心する者の頸に懸て下さる（本門の戒壇）そこで

此功德を詮索して見れば、全く是れ如意寶珠である（本門の本尊）。左れば是にて已に位は妙覺の佛陀だ。故に四大菩薩や諸天善神やは晝夜の別なく其人を守護し、且つ其人を保育て威光が十方法界に輝く正眞の佛陀にして下さるのです。大公周公の成王を攝扶す云々との御文が全く是なのであります。

更に是に註を加へますれば、成王は周の二代で十四歳の時に皇帝の位に即た人です。然れども年齢が僅に十四歳の獨立して國政を料理する事は出来ませぬ。恰も今ま云ひました位だけの佛陀の様なものです。そこで親の武王

の軍師たる大公望や、叔父に當る周公擔やが、或は師傅と爲り或は攝政と爲り、遂に獨立の皇帝にしたので、全く此位だけの佛陀を諸大菩薩や諸天善神やが、守り育て、妙覺の實威ある佛陀にして下さると云ふのと同じ事です。之を以て其實例として居させ玉ふと云ふ御書に於ても毫も疑ふ所はないのです。

本宗の法義は是です。然るに現在の本宗は此法義が紊亂して、信心と云はば已が非望を濫に別勸請せし諸神諸天に祈り、甚しきは云ふに忍びぬ醜狀を笠森や慈雲やに祈つて、唱題は之を全ふする誦文の如く心得て居ると云ふ

状態ではないか、是が佛祖の本懷を祖述し、宗祖の本意を繼承する宗門であるとは、何處を押したらばそんな音がするのであらうか。

是れ故に吾人は二十年來法義の一定を叫んで居ます。然るに此事は絶てなくして年は一年よりも賽錢箱が殖て來る。勿論天理教や金光教が盛んに行はれる世の中、何か彼とか理窟を付て神怪を勸請し、以て其前に賽錢箱を据へ置かば、迷ひの衆生は多く是に集り、賽錢箱を重くして呉れるには相違なかるべくも、去にても法義の汚れを如何にするか、近來の聖僧河田日因大僧正は常に嘆じ

て。今の宗門の學者は道德上の詐偽取財犯人だと仰せられて居ました。

最後に一言。一定の法義を離れて本宗はない。本宗は一定の法義に依て團結した宗門である。佛祖の本懐を祖述すと云ふのも一定の法義の事だ。宗祖の本意を繼承すと云ふのも一定の法義の事だ。本義を離れては佛祖の本懐はない。法義を離れては宗祖の本意はない。一に單だ法義のみが中心と成て居るのです。

又た法華經が尊いと云ふのも此法義の出所經なるが故です。本宗が尊いと云ふのも此法義を一宗の精神として居

るが故です。左れば法華經に歸依する者。本宗を信心する者。須らく其心を改めて。専ら此法義を尊信せよ。斯すれば疾疫病患、惡事災難、共に是は諸菩薩諸天の加被力に依て其の未だ發し起らざるに之を攘ふ事が出來ます。當に然るのみならず。業務も是が爲に盛んに。壽命も是が爲に延びて來ます。宗祖の曰く、後五百歲廣宜流布と説れたれば殊更に時國相應の教なり。善惡不二の南無妙法蓮華經なれば惡人も必らず成佛す。邪正一如の南無妙法蓮華經なれば邪見彌々憑みあり。皆成佛道の南無妙法蓮華經なれば十界平等に利益す。速疾頓成の南無妙法

蓮華經なれば二生三生を期す可からず。唯だ是れ一生入
 妙覺の大法なり。仰て信受すべし（萬法一如抄）又た曰
 く。小兒乳を含むに其味を知らざれども自然に身を養ひ
 者婆が妙藥誰か辨ひて之を服せる。濁水情なけれども
 月を浮べて自から清めり。草木言はざれども雨を得て自
 然に花さく。是れ豈に覺の力ならんや。妙法蓮華經の五
 字は文に非ず義に非ず。唯だ一部の意のみ。初心の行者
 其義を知らざれども之れ行すれば任運に其義に契當れり
 と（四信五品抄）以て眞味を味はつて下さい。
 之を本宗の綱要とす。今ま筆を擱くに當つて一言行者の

心得に。此大法の功德を授からんとせば。正行には題目
 を口唱し。助行には一部又は自我偈一卷を讀誦し。以て
 内心の信を固めて道場に坐し。今身より佛身に至るまで
 能く持つ。南無妙法蓮華經と誓ひを立て。佛祖宗祖の使
 者たる僧侶に戒法を受け。同時に戒名と本尊とを授かれ
 よ。斯くすれば眞實の即身成佛です。而して以後は造次
 轉肺も之を忘れず。一意専念その業務に勵み。儲け得た
 餘財を報恩謝徳に供せよ焉。

更に一言を以て現在の信徒の心得に供す
 公等は常に口に即身成佛せりと語る。何日何處で如何

なる儀式を以て一切の功德を授かりしかり。是なくんば
 即身成佛にあらず。所以に公等の多くは自己に戒名な
 し。戒名は是れ即身成佛せし其佛の寶號なり。若し戒
 名を以て死者の名義なりと思はゞ。公等は全く念佛の
 信徒なり。蓋し念佛は未來の成佛を説く。故に寶號を
 未來に求むれば可なり。之を按せよ。

通俗日蓮宗綱要終

通俗日蓮宗綱要跋

闇中に光明あり悟中に迷夢あり、然れば信は何れを取る
 か、予は只だ日蓮宗信徒の家に生れたるが爲の日蓮宗信
 徒と云ふ耳にて、從來未だ曾て日蓮宗の法義を知らざり
 き、然るに頃日硯友鐵腸子通俗日蓮宗綱要を著はしたり
 と、偶々其脱稿の日に子を訪問し、偶然にも其秘極と云
 ふ章を読み、大に悟る所ありたり

所謂悟る所とは、一家一身の吉凶禍福は、悉く擧て之を
 妙法の五字に托し、信仰の心を報恩謝徳の念に改め、一
 意専念業務に精勵し、其得たる所の淨財を捐して是が實

行に努むるに在りとの一節即ち是なり

予は現在の世は複雑なり、複雑の世に更に佛道の修行を加へて複雑を重ね、両ながら要を得る能はざるべしとして信を起さざりしに、其秘極が此複雑を避けて單純に淨財を捐し、報恩謝徳の念の實行に充るに在りと悟りし上は以後更に業務に精勵し、是より得たる淨財を以て讀經唱題の料に充て、全く報恩謝徳を實行する心となりたり、蓋し時機相應の教に時機相應の行と信じられたればなり、硯友に因みて跋を書けとの勧めに依て如是

明治壬子初一月

轉迷院開悟日得居士誌

明治四十五年二月二十日印刷
全 年二月廿五日發行

正價ナメシ皮表装 金廿五錢 郵税金四錢
全 クロース表装 金拾貳錢 郵税金四錢

著作者 黒澤鐵腸

大阪北區伊勢町十九番地

發行者 神谷梅吉

大阪東區北新町貳丁目廿番地

印刷者 本田恒市

大阪北區伊勢町十九番地

不許
複製

發行所 何ぞむ社

特約販賣元

大阪心齋橋塩町	矢島誠進堂
全 心齋橋安土町	吉田善藏
全 梅田驛前	盛文館
京都東洞院三條上ル	村上勘兵衛
東京々橋區壘町	須原屋書店
名古屋市大須門前町	其中堂書店
岡山市東中山下	書籍株式會社
福岡市紙屋町	高田弘文堂
熊本市上通町三丁目	金書堂
福井市佐久良下町	平澤書店

施本の爲に多數部の御注文は割引すべし

村雲日榮尼公殿下御題字
 本化門下各宗管長御題字及序文
 全大學長題讚序文及校閱訂正等

縮刷訓譯法華經

開結二經共
 總平かな付

洋裝全壹冊製本堅牢
 金文字入紙數五百頁

クロス表裝金七拾錢
 皮表裝三方箔金九拾五錢
 郵稅各金八錢

右は原漢文を和譯した上に總かな付にしてあれば最も讀み易き法華經開結十卷也

大阪東區心齋橋安土町北入

發行元

日蓮宗御用書林

吉田善藏

右は御送金の御都合上本社へ
 申込ありても直に送本すべし

ゆきむ社

黒澤鐵腸居士著書發行廣告

今日のお祖師様 全

三十日間柱掛日繰帳 正價郵税共 金參拾錢

右はお祖師様三十年間の御弘通を三十日間に縮め、毎日其要所くを記憶に入れさせんとの仕組なり

大法のお祖師様 全

寸珍洋装二百四十頁 正價郵税共 金卅錢

右はお祖師様二十年御弘通の要所くを詳記し更に大法に結び付てお祖師様が妙法五字の化身たる事を明せし書なり

立正安國論 活用篇 全

洋装 正價 金拾貳錢 郵税 四錢

右は立正安國論に基き、近來の天變地天も亦た御在世の通りなる事を更に例を引き証を擧て詳述せし書なり

津川日齊老師講述 黒澤鐵腸再註校訂

通俗法華經大意講義 全

洋装 正價 金十五錢 郵税 金四錢

右は老僧正が河原コトと云ふ篤信の女子の爲に開結十卷を通俗に講述せられしを老僧正の紀念の爲に出版せし書なり

眞宗非佛教論

全

洋装 正價 金五錢 郵税 金二錢 多數割引ス

右は金澤市に於ける三年間の大紛擾を三日間に反撃して遂に彼に降伏せしめたる大演説の筆記なり論鋒は爆裂彈の如く直に敵の本營たる六字の名號を徹塵に粉碎しあり從來施本に用ひられて已に三萬餘の發行を重ねたる近來の名著なり

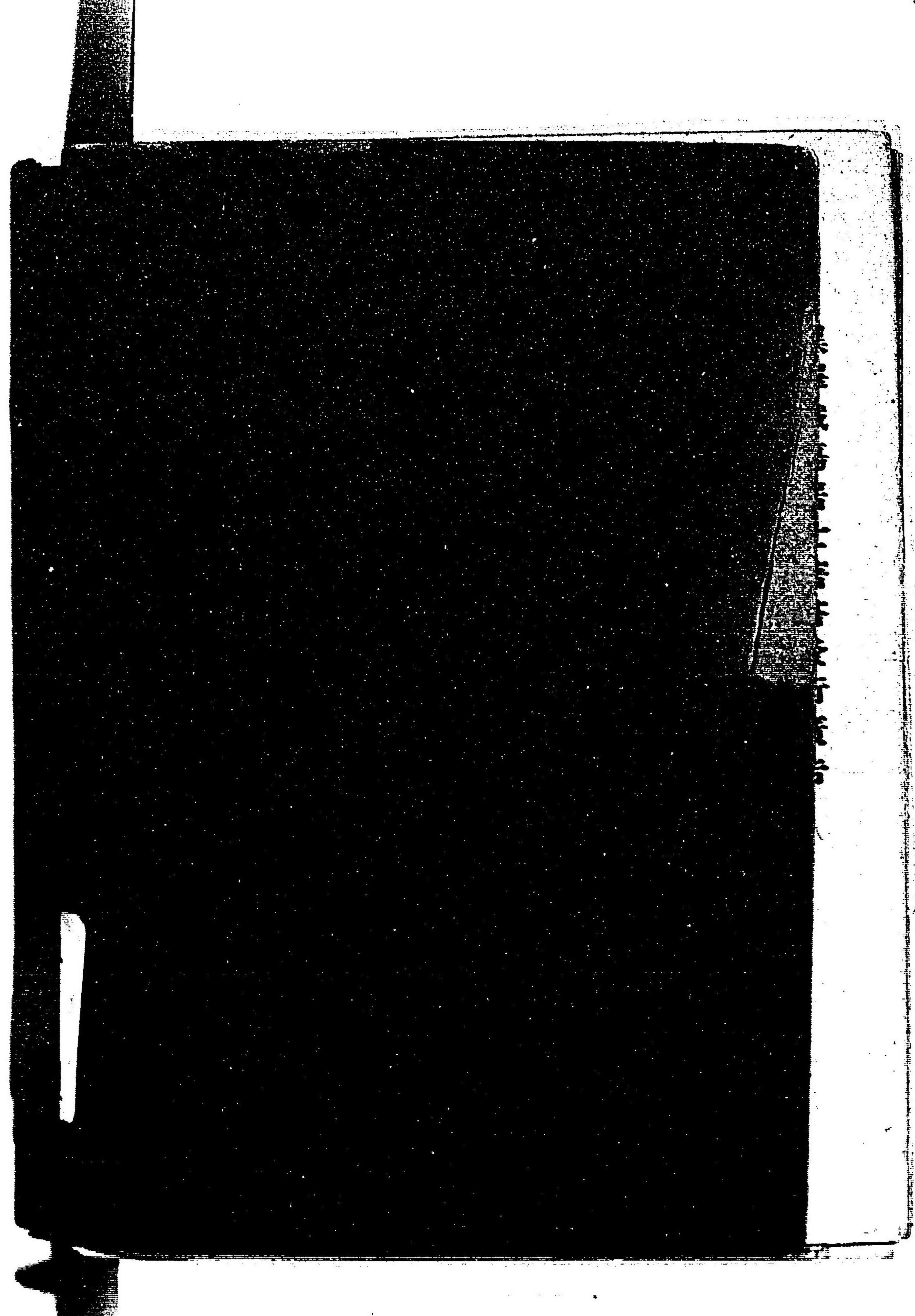
●五十部以上送料共に五十部金壹圓五拾錢の割

大阪南區塩町心齋橋 矢島誠進堂

發行元 全 北區伊勢町一丸 何ぞむ社

270

23



020024-000-0

特61-451

日蓮宗綱要 (通俗)

黒沢 鉄腸 / 著

M45.2

ABH-0190

